京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-29

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇〇六―二九

平安京左京六条四坊三町跡

平安京左京六条四坊三町跡

2007 年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京六条四坊三町跡

2007 年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方米から、数千平方米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび消防署新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

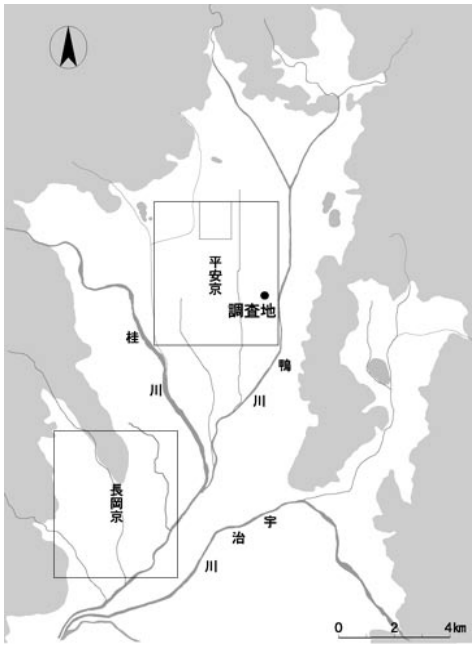
平成 19 年 3 月

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　川　上　　貢

例　　言

1	遺　跡　名	平安京左京六条四坊三町跡
2	調査所在地	京都市下京区間ノ町通五条下る大津町２他
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　桝本賴兼
4	調 査 期 間	2006 年 11 月 28 日～ 2007 年３月 12 日
5	調 査 面 積	約 600 ㎡
6	調査担当者	菅田　薫
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位 (m) を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用基準点	京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
11	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
12	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
13	遺 物 番 号	土器類・瓦類ごとに通し番号を付した。
14	掲 載 写 真	村井伸也・幸明綾子
15	基準点測量	宮原健吾
16	本 書 作 成	菅田　薫 瓦の実測・拓本・観察は櫻井みどりが担当した。
17	編集・調整	児玉光世・近藤章子・山口　眞・吉本健吾



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯と経過 …… 1
２．位置と環境 …… 2
（１）位置と環境 …… 2
（２）周辺の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 5
（１）調査区の層序 …… 5
（２）遺構の概要 …… 5
４．遺　　物 …… 13
（１）遺物の概要 …… 13
（２）土器類 …… 13
（３）瓦類 …… 17
５．ま と め …… 30

図　版　目　次

図版１　遺構　１　地業状遺構 111（南から）
２　地業状遺構 111 断面（北から）
図版２　遺構　１　池 77- Ⅱ期全景（東から）
２　最終面全景と池 77- Ⅰ期（東から）
図版３　遺構　１　池 77- Ⅲ期全景（北から）
２　景石（南東から）
３　池 77- Ⅱ期の池を埋めた焼瓦（南から）
図版４　遺構　１　江戸時代遺構面全景（東から）
２　池 77- Ⅳ期全景（東から）
図版５　遺構　１　土壙 108 上面（西から）
２　土壙 108 完掘（西から）
３　土壙 06（北から）
図版６　遺物　軒丸瓦
図版７　遺物　軒平瓦

図版８　遺物　鬼瓦・焼瓦

挿　図　目　次

図１　調査区配置図（１：500）　……　1
図２　周辺の調査位置図（１：5,000）　……　2
図３　調査前全景　……　5
図４　作業風景　……　5
図５　調査区断面図１（１：100）　……　6
図６　調査区断面図２（１：100）　……　7
図７　池 77- Ⅰ・Ⅱ期平面図（１：200）　……　8
図８　池 77- Ⅲ・Ⅳ期平面図（１：200）　……　9
図９　X=-111,376 ライン池 77 断面図（１：100）　……　10
図 10　池 77 景石実測図（１：40）　……　10
図 11　江戸時代遺構平面図（１：200）　……　11
図 12　土壙 06 実測図（１：40）　……　12
図 13　土壙 108 実測図（１：40）　……　12
図 14　池 77- Ⅰ期出土土器実測図（１：４）　……　13
図 15　池 77- Ⅱ・Ⅲ期出土土器実測図（１：４）　……　14
図 16　池 77- Ⅳ期出土土器実測図（１：４）　……　15
図 17　池 77- Ⅳ期出土瓦質陶器風炉　……　15
図 18　池 77 出土壁土　……　16
図 19　土壙 06 出土土器類実測図（１：４）　……　17
図 20　軒丸瓦拓影・実測図１（１：４）　……　18
図 21　軒丸瓦拓影・実測図２（１：４）　……　19
図 22　池 77 出土軒平瓦拓影・実測図１（１：４）　……　20
図 23　池 77 出土軒平瓦拓影・実測図２（１：４）　……　21
図 24　井戸 119 出土軒平瓦拓影・実測図（１：４）　……　22
図 25　丸瓦拓影・実測図（１：４）　……　22
図 26　平瓦拓影（１：４）　……　23
図 27　積み重ねによる転写が認められる平瓦　……　23
図 28　平瓦凸面のタタキ目　……　23
図 29　刻印瓦拓影（１：２）　……　24

図 30　雁振瓦拓影・実測図（1 ： 4）　…… 24
図 31　雁振瓦　…… 24
図 32　左京六条四坊三町四行八門と調査位置　…… 30

表　目　次

表 1　周辺の調査一覧表　…… 3
表 2　遺構概要表　…… 5
表 3　遺物概要表　…… 16
表 4　巴文軒丸瓦分類表　…… 18
表 5　軒瓦一覧表　…… 25

平安京左京六条四坊三町跡

1．調査経過

（1）調査に至る経緯と経過

この調査は下京消防署新築工事に先立つ発掘調査である。調査対象地は平安京左京六条四坊三町にあたり、平成 18 年 10 月に京都市文化市民局文化財保護課により既存建物（下京保健所）の基礎撤去に伴う立会調査が行われ、遺構の存在が確認された。その結果を受け、文化財保護課の指導の下、既存基礎の撤去後、当研究所が速やかに発掘調査を実施することになった。

発掘調査はプレハブ事務所などの付帯工事を開始、続けて重機掘削を実施した。隣接する道路などの安全面を考慮して約 600 ㎡を調査対象とし、調査中に出る残土置き場を考慮して当初は約 500 ㎡から着手した。調査の進捗に伴い遺構および出土遺物が万寿禅寺に関わるものであることが明らかとなり、平成 19 年２月３日、市民向けに調査成果を公開する現地説明会を開催し、約 350 名の参加者があった。この現地説明会を開催するにあたり、説明場所の確保のため残土を場外搬出し、以降残りの調査区も調査を同時進行した。

調査中、京都市文化市民局文化財保護課の現地指導を平成 18 年 12 月 18 日、平成 19 年１月 15 日、３月２日の計３回受けた。

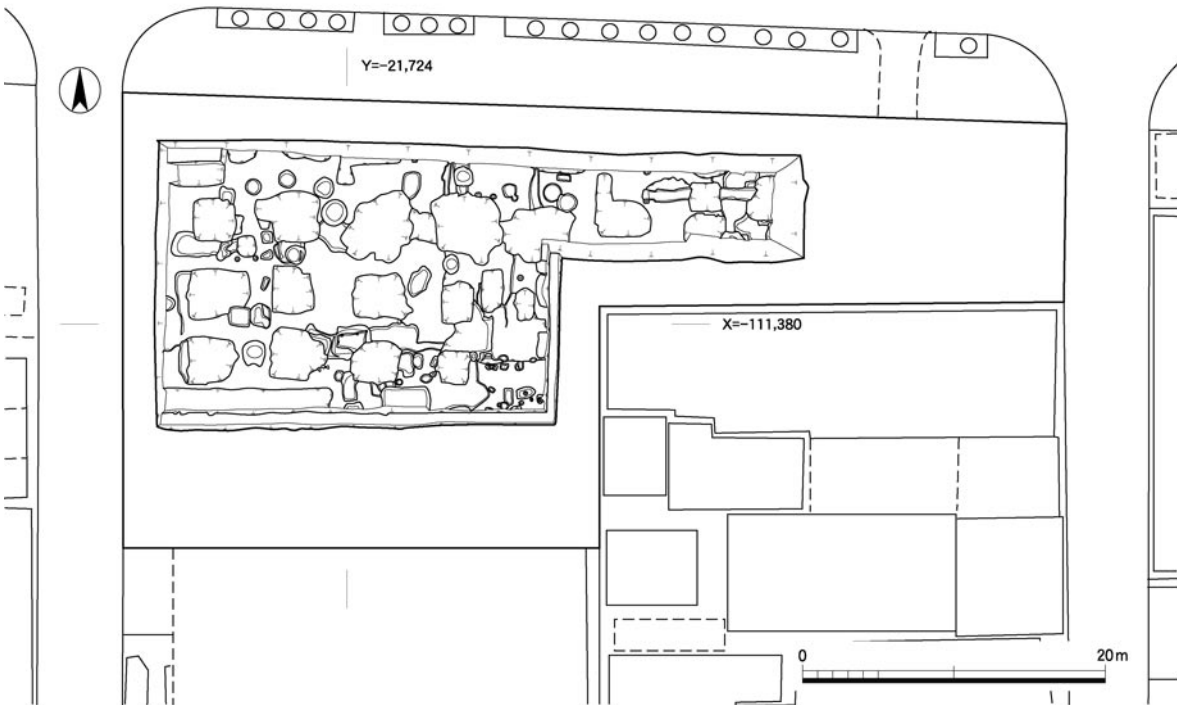


図１　調査区配置図（１：500）

２．位置と環境

（１）位置と環境

調査地は北東から南西に向かって緩やかに傾斜する緩扇状地上に立地する。五条通に北面し、東約 500 mには鴨川が南流する。遺構成立面はすべて砂礫層で、遺構面の標高は 30.7 mである。

調査地は平安京左京六条四坊三町にあたり、北に六条坊門小路、南に楊梅小路、東に高倉小路、西に東洞院大路に挟まれたほぼ中心に位置する（図 32）。周辺では平安時代前期には六条四坊四町に、光孝天皇御所の釣殿院が営まれ、また十一町から十四町を占める左大臣源融の邸宅である河原院（六条院）が所在した。平安時代後期には四町の地に白河天皇により六条内裏が営まれた。譲位した白河上皇は寛治元年（1087）に六条内裏の改修を行い、三町を含めた南北２町を占地するようになった。斎宮を辞された上皇皇女の媞子内親王は、この六条内裏に住まわれたが、永長元年（1096）八月、21 才で薨去された。翌二年十月、白河上皇は郁芳門院媞子内親王の追善として六条内裏を仏寺とし、この後、六条御堂と呼ばれるようになる。正嘉年中（1257 ～ 59）に浄土教から禅宗に転じ、この時六条御堂を万寿禅寺と改められた。また、暦応三年（1340）には北側の二町の地にあった後宇多女、崇明門院の報恩寺を合併し南北３町を占めるようになる。延文三年（1358）には京都五山の五位に列せられる。この間、幾度となく火災により焼失と再建を繰り返すが、天正十九年（1591）豊臣秀吉により現在地である東福寺の北側に移転する。この秀

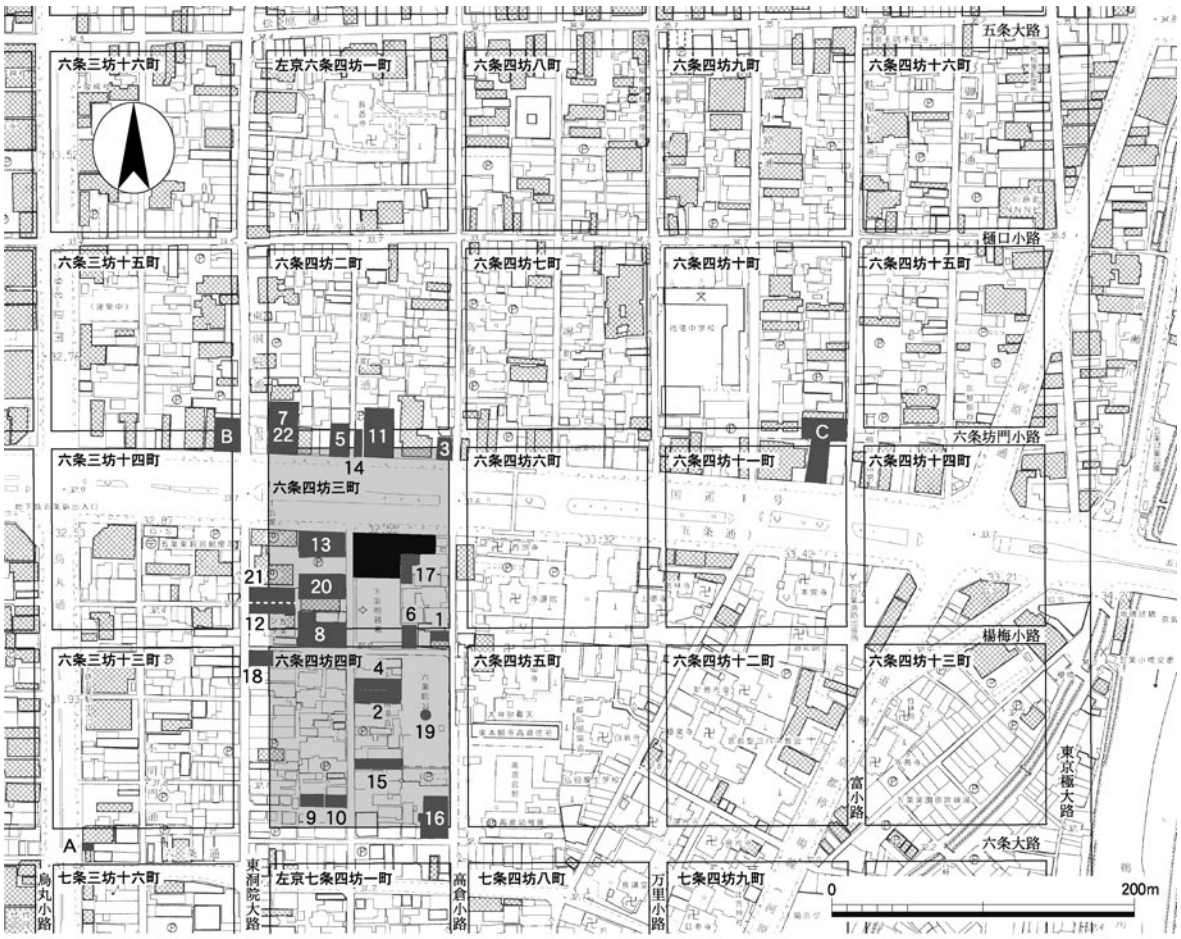


図２　周辺の調査位置図（１：5,000）

表１　周辺の調査一覧表

番号	遺跡名	調査方法	所在地	調査期間	遺　　構	文献
A	左京六条三坊十三町	発掘	下京区烏丸通六条上る北町181	1981.10.12～10.24	平安時代後期から鎌倉時代の土壙、柱列。室町時代の六条大路路面および側溝。江戸時代の溝、土壙、井戸。	1
B	左京六条三坊十四町	発掘	下京区東洞院通五条上る松屋町	1987.7.13～9.28	平安時代中期から室町時代末期にかけての六条坊門小路路面および側溝と東洞院大路路面および側溝。平安時代の落込、土壙。室町時代末期の濠２条。	2
C	左京六条四坊十・十一町	発掘	下京区五条通河原町西入本覚寺前町805他	1995.4.10～12.1	平安時代から室町時代にかけての六条坊門小路路面および側溝。平安時代の池状遺構。平安時代末期から鎌倉時代の井戸。鎌倉時代から室町時代の井戸、土壙、集石遺構。	3
1	左京六条四坊三町	立会	下京区高倉通五条下る堺町20	1981.4.27	地表下-0.8mで焼土、焼け瓦の攪乱多数。	4
2	左京六条四坊四町	立会	下京区間之町通五条下る塗師屋町123	1982.8.23	地表下-1.6mで室町時代後期の土壙。	5
3	左京六条四坊三町	立会	下京区五条通高倉西入万寿寺町152	1984.9.29	地表下-0.2mで江戸時代末期の焼土層。 -0.8mで江戸時代末期の包含層。	6
4	左京六条四坊四町	立会	下京区間之町通五条下る塗師屋町199	1984.11.14	地表下-1.14m以下、砂礫の地山層。	6
5	左京六条四坊三町	立会	下京区五条通間之町西入万寿寺町135他	1986.3.31	地表下-1.45mで平安時代中期の包含層。 -1.5mで平安時代中期の包含層。	7
6	左京六条四坊三・四町	立会	下京区間之町通五条下る大津町8	1986.9.24	地表下-0.82mで時期不明の包含層。	7
7	左京六条四坊三町	試掘	下京区五条通間之町西入万寿寺町122他	1986.12.1	地表下-1.42mで平安時代中期の整地層。	7
8	左京六条四坊三・四町	立会	下京区間之町通五条下る大津町15	1987.10.26	地表下-1.1mで近世以降の包含層。	8
9	左京六条四坊四町	立会	下京区間之町通五条下る塗師屋町105	1988.2.16	地表下-1.6m以下、砂礫の地山層。	9
10	左京六条四坊四町	立会	下京区間之町通五条下る塗師屋町105	1988.5.24	地表下-1.04mで近世以降の包含層。	9
11	左京六条四坊三町	立会	下京区間之町通五条下る塗師屋町199	1990.5.1	地表下-1.9m以下、砂礫の地山層。	10
12	左京六条四坊三町	立会	下京区東洞院通五条上る福島町513	1991.3.13	地表下-0.45mまで現代盛土。	11
13	左京六条四坊三町	立会	下京区間之町通五条下る大津町1、5、21	1992.10.5	地表下-1.15m・-1.31m・-1.5mで中世の包含層。	12
14	左京六条四坊三町	立会	下京区五条通東洞院東入万寿寺町137	1993.3.10	地表下-1.15m以下、灰褐色砂礫層。	13
15	左京六条四坊四町	立会	下京区間之町通五条下る塗師屋町112	1994.2.15	地表下-0.89mで中世の包含層。-1.37mで平安時代後期の包含層。-1.5mで平安時代前期の包含層。	14
16	左京六条四坊四町	立会	下京区高倉通六条上る冨屋町48-1	1994.2.22	地表下-1.4mで中世の包含層。-1.37mで平安時代中期の六条大路路面。	14
17	左京六条四坊三町	立会	下京区高倉通五条下る堺町25、26	1996.6.12	地表下-1.65mで近世の池状堆積。	15
18	左京六条四坊四町	立会	下京区東洞院通五条上る和泉町522他	1997.6.9	地表下-1.4m・-1.5mで室町時代の包含層。	16
19	左京六条四坊四町	立会	下京区高倉通五条下る冨屋町39他	2002.2.6～2.8	地表下-1.0mで室町時代後期から近世の遺物を包含する氾濫状堆積。	17
20	左京六条四坊三町	立会	下京区間之町通五条下る大津町9他	2002.9.11～9.13	地表下-1.75m以下、砂礫の地山層。	17
21	左京六条四坊三町	立会	下京区東洞院通五条上る福島町511他	2004.12.6～12.10	№１地点：-1.5mで平安時代前期の湿地状堆積。 №２地点：-1.38mで室町時代前期の包含層。	18
22	左京六条四坊三町	立会	下京区五条通東洞院東入万寿寺町122他	2006.5.23～6.5	地表下-0.5mで江戸時代末期の包含層、 -1.8m以下、砂礫の地山層。	19

吉の都市改造により一町の中心を南北に貫く「間之町」通ができ、寺域北側を東西に通る「樋口小路」が万寿寺通となる。また、相次いで造営された方広寺、豊国神社と洛中を結ぶために六条坊門の鴨川に橋を架け、現在の五条通が開かれる。そして第二次世界大戦のさなか堀川通とともに建物疎開が行われ現在の景観へと変わっていく。

（２）周辺の調査

左京六条四坊三町では今回の発掘が初めてである。周辺では北西にあたる左京六条三坊十四・十五町、東洞院大路・六条坊門小路（Ｂ）で発掘調査が行われており、平安時代中期から室町時代にかけての大路・小路の路面、側溝を検出している。また、六条四坊十・十一町（Ｃ）で行った発掘調査では六条坊門小路に係わる道路遺構とともに、河原院（六条院）に伴うとみられる園池跡を検出している。

文献（表１　周辺の調査一覧表）

1　平尾政幸「左京六条三坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和 56 年度』京都市文化観光局　1982 年
2　小森俊寛・上村憲章「平安京左京六条三坊」『昭和 62 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991 年
3　堀内明博「平安京左京六条四坊・河原院跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996 年
4　『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和 56 年度』京都市文化観光局　1982 年
5　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 57 年度』京都市文化観光局　1983 年
6　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 59 年度』京都市文化観光局　1985 年
7　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 61 年度』京都市文化観光局　1987 年
8　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 62 年度』京都市文化観光局　1988 年
9　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和 63 年度』京都市文化観光局　1989 年
10　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化観光局　1991 年
11　『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』京都市文化観光局　1992 年
12　『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』京都市文化観光局　1993 年
13　『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』京都市文化観光局　1994 年
14　『京都市内遺跡立会調査概報　平成６年度』京都市文化観光局　1995 年
15　『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』京都市文化市民局　1997 年
16　『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』京都市文化市民局　1998 年
17　『京都市内遺跡立会調査概報　平成 14 年度』京都市文化市民局　2003 年
18　『京都市内遺跡立会調査概報　平成 16 年度』京都市文化市民局　2005 年
19　『京都市内遺跡立会調査報告　平成 18 年度』京都市文化市民局　2007 年

図３　調査前全景

図４　作業風景

３．遺　　構

（１）調査区の層序（図５・６）

調査区は、ほぼ旧下京保健所の建物に重なっており、基礎撤去に伴う整地と攪乱が 0.6 mから深いところで 1.9 mある。調査区の基本層序は最も残りの良好な箇所で、①江戸時代末の整地層（図５・６断面図の１・２・４・16・17 層）が約 20 ㎝、②洪水層とみられる粗砂層（３層）が 10 ～ 20 ㎝、③江戸時代の耕作土とみられる層（６層）が約 40 ㎝、④桃山時代から江戸時代の遺物を含む整地層（18・19 層）が約 10 ㎝の厚さで堆積する。④整地層を除去すると、ほぼ Y=-21,713 ラインから東は地山層である砂礫層（43・44 層）となるが、西側は池内堆積土である腐植土が堆積する。江戸時代の遺構は④整地層の暗オリーブ褐色泥砂層上面で検出した。

（２）遺構の概要

検出した遺構は時期不明の地業状遺構、室町時代から桃山時代の池、江戸時代の井戸・土壙・溝・墓などがある。

地業状遺構 111　調査区の南東部で検出した。西側は池 77 により削平を受け、北側も攪乱を受ける。東・南側は調査区外である。礎石据え付け穴、雨落ち溝などを検出していないため建物地業か不明であるが、周辺の地山層とは異なるため、地業状遺構と考えた。東西約８m、南北約７mを検出した。地業の単位は４区画認めたが、あまり明瞭ではない。直径３㎝以下の小礫を密に

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
鎌倉時代？	地業状遺構111	
室町時代	池77	
江戸時代	土壙06・108、井戸119、整地層、耕作土層	

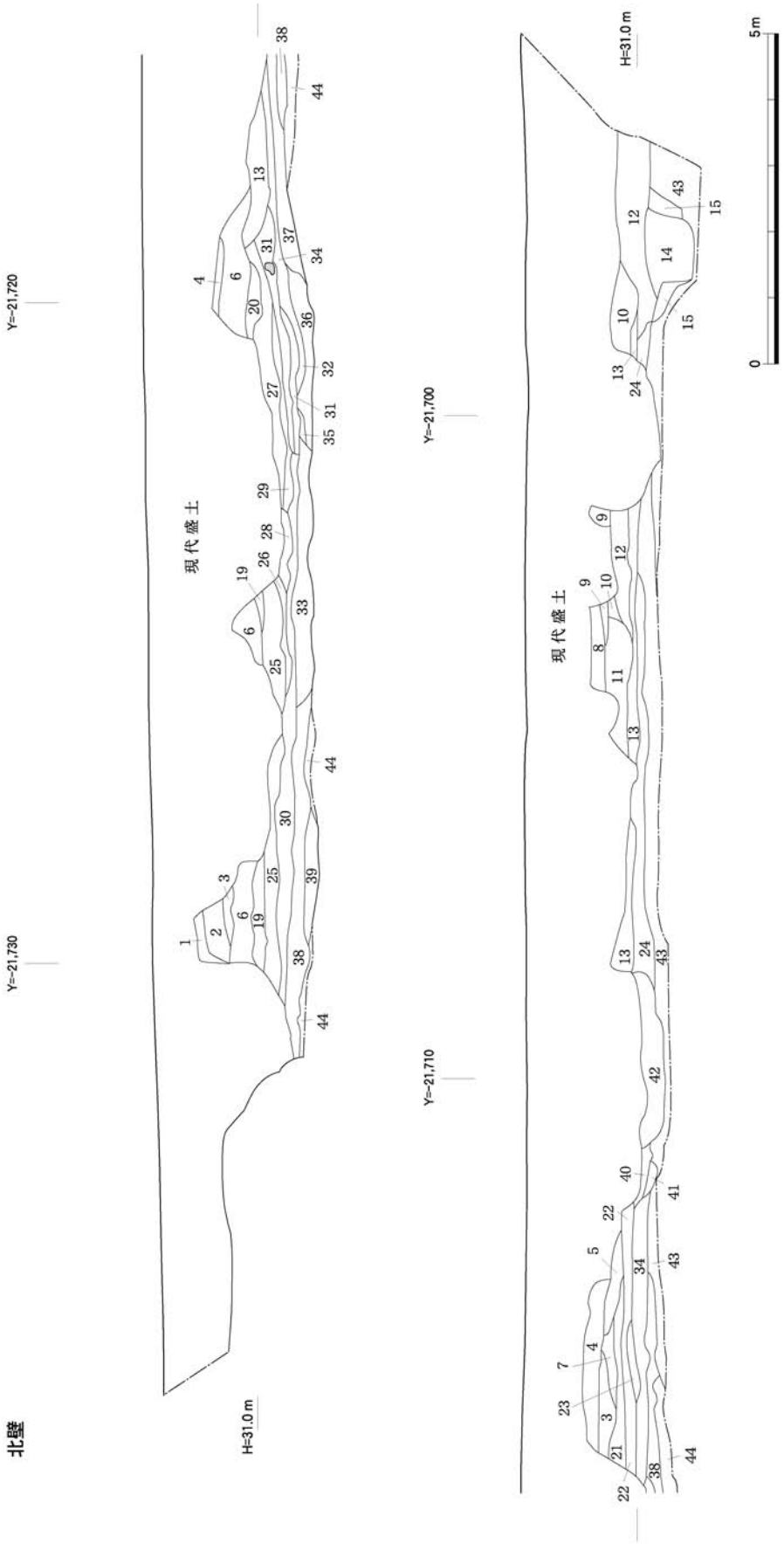
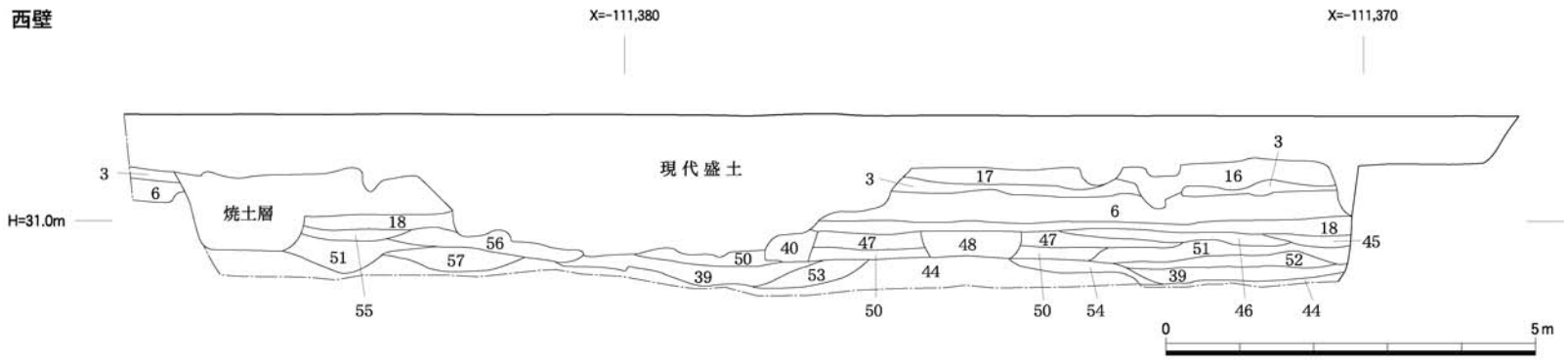


図５　調査区断面図１（１：100）



1　5YR4/3にぶい赤褐色泥砂、焼土・炭・灰40%混
2　10YR5/2灰黄褐色泥砂
3　10YR6/2灰黄褐色粗砂
4　5YR4/4にぶい赤褐色砂泥、焼土・炭・灰50%混
5　10YR4/1褐灰色泥砂、焼土・炭・貝片15%混
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（旧耕土）
7　10YR4/2灰黄褐色泥砂
8　10YR6/1褐灰色砂礫、φ30～140㎜
9　10YR4/1褐灰色砂泥
10　5Y4/2灰オリーブ粗砂
11　5YR4/2灰褐色砂泥
12　10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
13　7.5YR4/1褐灰色砂泥
14　2.5Y4/2灰黄色・10YR4/1褐灰色砂泥、φ100～150㎜礫混（井戸119）
15　10YR5/3にぶい黄褐色粗砂（井戸119掘形）
16　5YR4/1褐灰色泥砂、焼土・炭30%混
17　2.5Y3/1黒褐色泥砂、焼土・炭・灰60%混
18　2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
19　5Y4/1灰色砂泥
20　5Y5/2灰オリーブ色微砂
21　7.5YR4/4褐色泥砂
22　5YR4/1褐灰色砂泥、φ30～60㎜円礫混
23　5YR4/4にぶい赤褐色砂質シルト、焼土・炭20%混
24　10Y5/1灰色粗砂、φ50㎜礫少量混
25　10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
26　10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
27　10YR4/2灰黄褐色泥砂、φ30～70㎜礫混
28　10YR7/3にぶい黄橙色粗砂
29　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト、炭少量混
30　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
31　2.5Y5/2暗灰黄色荒砂、φ10～20㎜
32　10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色粗砂混
33　2.5Y4/1黄灰色シルト
34　10YR6/6明黄褐色シルト、7.5YR6/6橙色粗砂φ20～60㎜礫混
35　5Y6/1灰色粗砂
36　10YR3/3暗褐色砂泥
37　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、φ20～60㎜礫混
38　10YR4/1褐灰色シルト、φ30～100㎜礫混
39　10YR4/1褐灰色シルト
40　10YR3/1黒褐色砂泥、焼土・炭15%混
41　2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
42　10YR3/1黒褐色砂泥、10YR5/6黄褐色シルトブロック30%混、φ30㎜礫混
43　5Y6/4オリーブ黄色細砂（地山）
44　7.5YR5/6明褐色粗砂、φ60～200㎜礫混
45　5Y4/2灰オリーブ色微砂
46　10YR5/3にぶい黄褐色粗砂
47　5Y4/2灰オリーブ色砂礫、φ50㎜
48　2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
49　10YR6/1褐灰色粗砂
50　5Y3/2オリーブ黒色砂礫、φ100㎜
51　5YR4/1褐灰色泥砂、5Y5/2暗オリーブ色粗砂
52　2.5Y4/1黄灰色粘土
53　5Y5/2灰オリーブ色粗砂
54　5Y5/1灰色砂礫
55　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
56　10YR5/2灰黄褐色砂礫、φ60～140㎜
57　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂

図6　調査区断面図2（1：100）

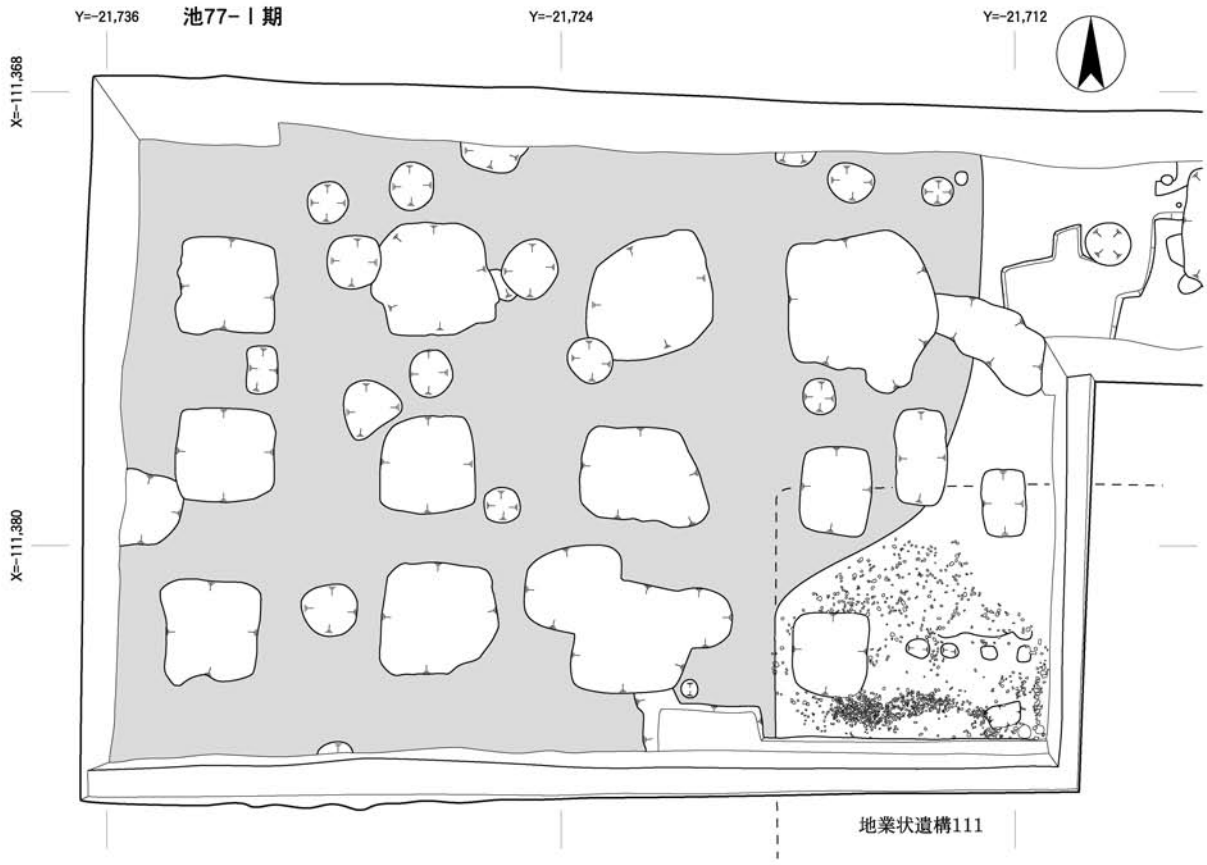
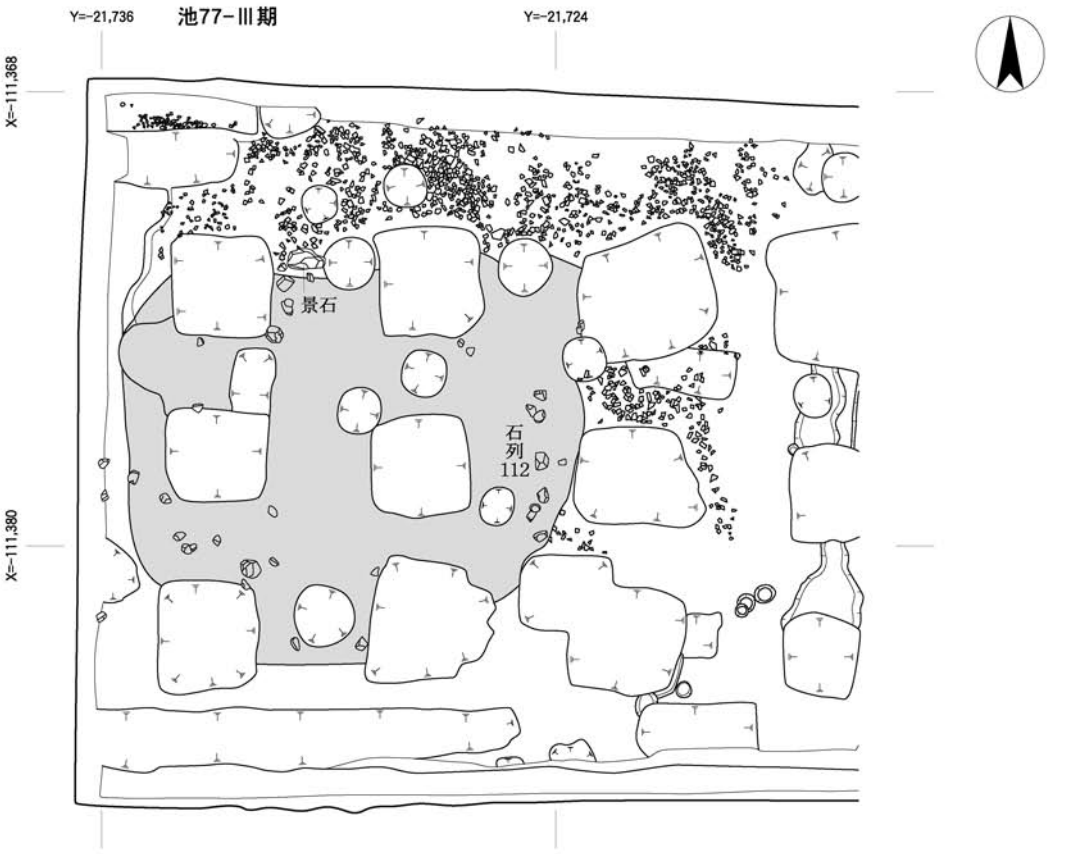


図７　池 77-Ⅰ・Ⅱ期平面図（1：200）



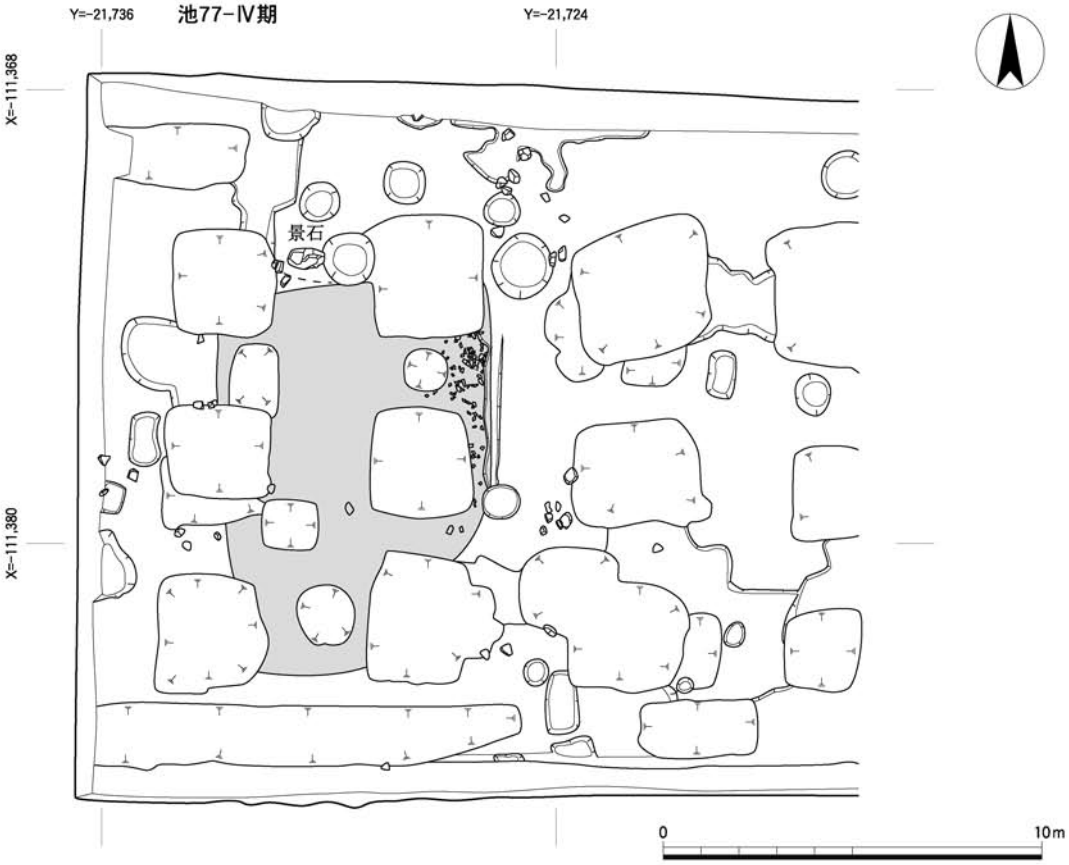
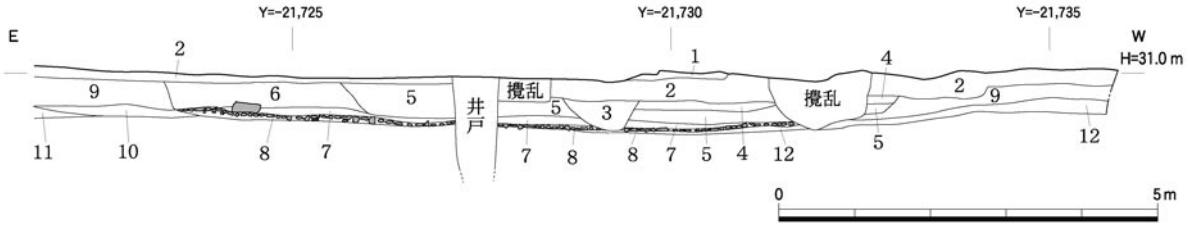


図８　池 77- Ⅲ・Ⅳ期平面図（１：200）



1　漆喰
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂2.5Y7/8黄色砂混
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト
5　7.5YR2/3極暗褐色腐植土　池77-Ⅳ期
6　5Y4/2灰オリーブ色砂礫（φ50㎜、焼瓦）
7　10YR3/3暗褐色腐植土
8　2.5Y5/2暗灰黄色粗砂（φ60～90㎜の礫を敷く）　池77-Ⅲ期
9　5Y4/2灰オリーブ色砂礫（φ50㎜、焼瓦・焼土・炭多量に含む）　池77-Ⅱ期
10　5YR4/1褐灰色泥砂
11　7.5YR3/1黒褐色シルト
12　5Y3/2オリーブ黒色砂礫（φ100㎜）　池77-Ⅰ期

図９　X=-111,376 ライン池 77 断面図（１：100）

充満させる単位と、それより大きい礫を充満させる単位、拳大の礫と粘質土の混土による単位とがある。礫内から小片であるが、鎌倉時代の土師器片が出土している。

池 77　大きく４期に分けられる。

Ⅰ期（図７） Y=-21,713 から西側、１町の東西中心を越えて西側へ拡がるとみられる。洲浜・景石は検出していない。埋土はシルトと礫の混土層（図５・６－ 38･39 層、図９－ 11･12 層）で、出土遺物は少ない。

Ⅱ期（図７）東肩は Y=-21,718 ライン付近、西肩は調査区西壁付近にある。北肩は X=-111,370 ライン付近にあるが、東側で北側調査区外に延びる。ほぼ東西約 18.0 m、南北 16.5 mの方形を呈す。東肩の勾配は緩やかに傾斜するが、西・北側は急に立ち上がり北西部では深さ約 0.55 mある。池底はⅠ期の池底と変わらない。埋土は泥砂と礫の混土層（図９－９・10 層）で、池の北・東側は多量の焼けた瓦（図版８）が出土した。

Ⅲ期(図８）Ⅱ期と西岸の位置は変わらないが、北･東･南側の規模を縮小している。東西 11.0 m、南北 10.5 mの方形を呈し、深さ 0.5 mある。北・東側はⅡ期の池を多量の焼けた瓦・礫で埋めている。東側では池底に人頭大からやや大きめの河原石を南北に並べ、土留めとみられる施設（石列 112）を施している。池の北岸中央に長径 115 ㎝、短径 55 ㎝、高さ 55 ㎝の景石とみられるチャートを一石据えている（図 10)。また、池底にはうすく腐植土と砂が堆積し（図９－７・８層）拳大の小礫を敷き詰めている。

Ⅳ期（図８） 東西約７m、南北約 10.5 mの方形を呈す。深さ約 0.5 mで、腐植土が厚く堆積する。

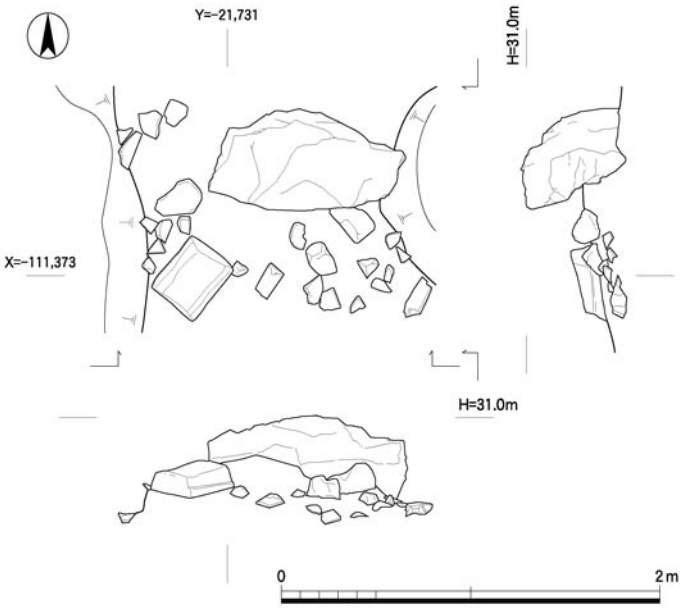


図 10　池 77 景石実測図（１：40）

江戸時代の遺構（図 11）

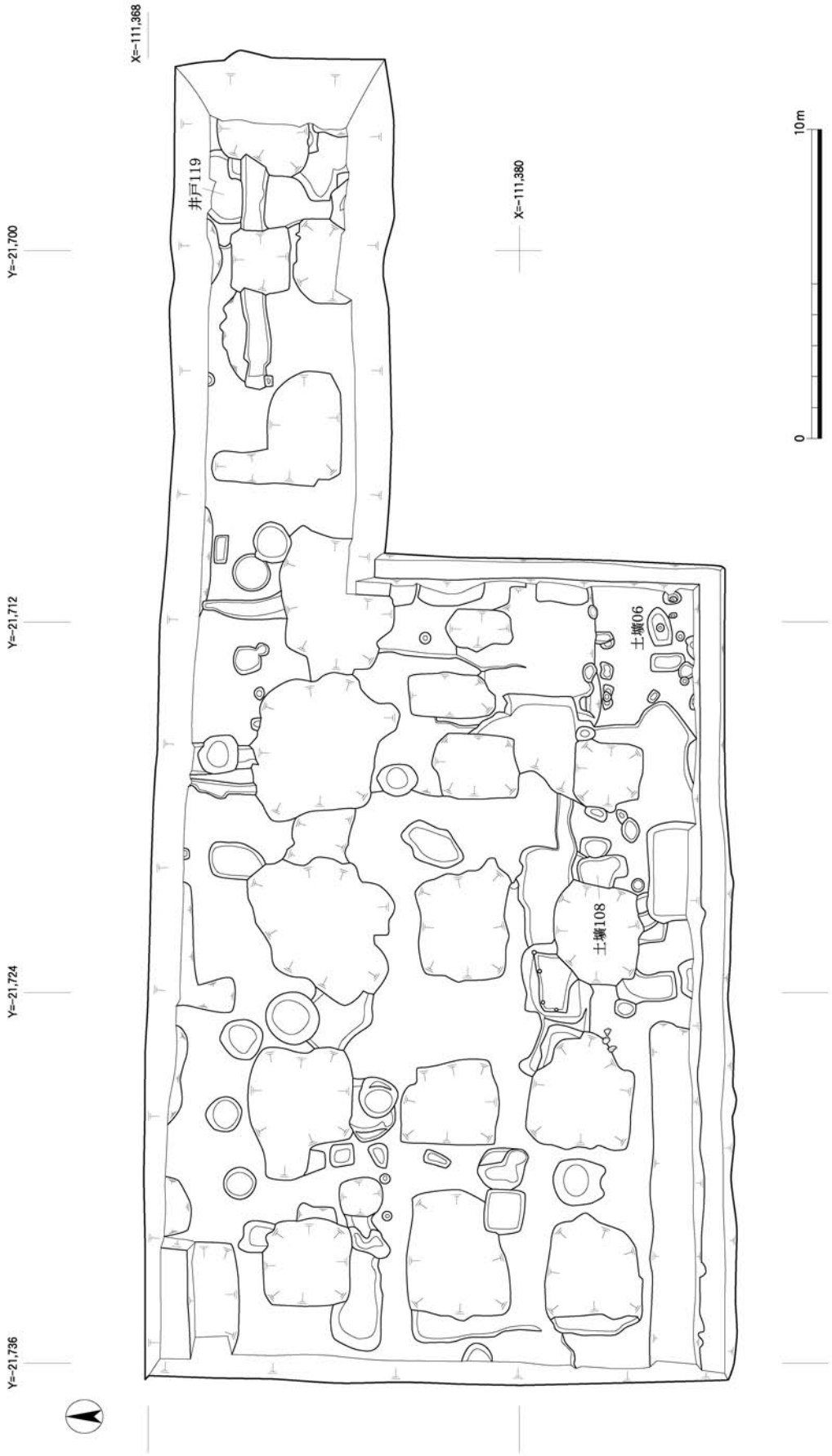


図 11　江戸時代遺構平面図（1：200）

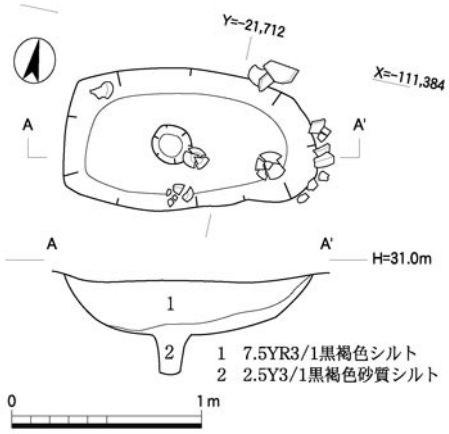


図 12　土壙 06 実測図（1：40）

土壙、井戸、溝などを検出した。

井戸 119　調査区東端の北壁断面で確認した。調査区内では井戸掘形のみである。

土壙 06（図 12）調査区の南東部で検出した。東西 1.2 m、南北 0.75 mの不整形な楕円形を呈する。深さ 0.29 mで、中央やや西寄りに直径 0.21 m、深さ 0.20 mの円形のピットがある。埋土は２層あるが、下層の黒褐色砂質シルト層は中央のピットにそのまま堆積しており、土壙に伴うピットである。埋土からは完形を含む土師器皿が大量に出土した。

土壙 108（図 13） 調査区中央部やや南寄りで検出した。掘形の西側を後世の攪乱により壊されるが、土壙中央部に 52 ㎝× 40 ㎝の長方形の木製の箱を置く。木質部の腐食著しく、高さは不明。崩れ落ちて蓋とみられる板材が一部に残り、その上に扁平な河原石が一石載っていた。また箱の底部にも 14 ㎝角の方形を呈す石が一石認められた。墓とみられるが、骨片などの出土はない。遺物は少なく蓋材の上から少量の土師器、土製人形が出土した。江戸時代後半と思われる。

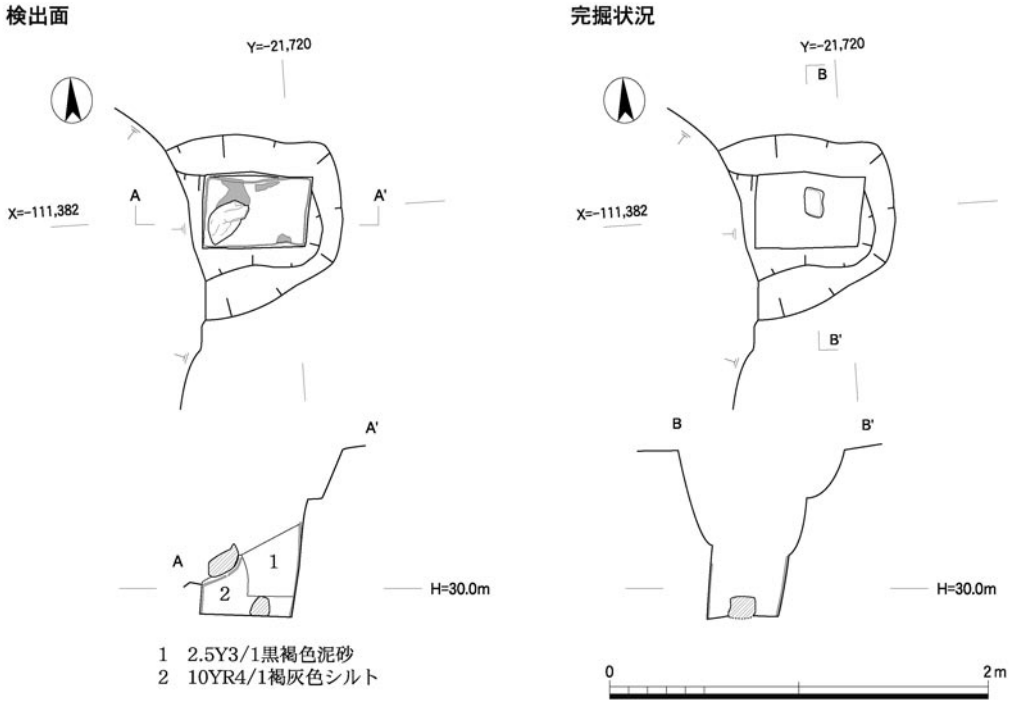


図 13　土壙 108 実測図（1：40）

4．遺　　物

（1）遺物の概要

出土遺物は、古墳時代から江戸時代までの遺物である。

古墳時代の土師器甕口縁部片が1点、平安時代では土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦が出土しているが量は少なく、小破片のものが多い。古墳時代から平安時代までの土器は、すべて二次堆積のもので元位置を保つものはない。

出土遺物の大半は室町時代から江戸時代までのもので占められる。池77-Ⅱ期を埋め立てた火災処理土からの瓦が最も多い。瓦類は軒瓦など総重量は13,000 kgを測る。土器類には土師器、焼締陶器、瓦器、輸入陶器、施釉陶器などがある。

（2）土器類

池77-Ⅰ期出土土器（1～16、図14）　1～15は土師器皿である。口径6.4～9.8 ㎝の小型のもの（1～5）、口径11.2～12.5 ㎝の中型のもの（6～12）、口径14.5～14.7 ㎝の大型のもの（13～15）がある。2はへそ皿である。16は輸入白磁で三角の玉縁の付く椀の底部である。平安時代後期である。

池77-Ⅱ期出土土器（17～49、図15）　17・18は口径7.6～8.3 ㎝、器高1.4～1.7 ㎝の小型の土師器皿で、円盤状の底部から外に大きく開く体部をもつ。体部内面をナデる時に強く体部外側の底部からの立ち上がり部を押えるため、内面の底部と体部の境は凹む。17は口縁端部の一部分に煤が付着する。19～22は口径6.6～6.8 ㎝、器高1.6～1.8 ㎝。底部が内側に突出したへそ皿である。23～35は口径10.4～12.4 ㎝、器高1.9～2.8 ㎝の土師器皿である。24は内面底部と体部の境目が強い横ナデにより明瞭な段となっている。他は直線的に体部が立ち上がる。29・32の口縁端部には煤が付着する。36～47は口径13.8～15.6 ㎝、器高2.1～2.8 ㎝の大型の土師器皿。色調は17・18・24がにぶい黄橙色、他は浅黄橙色から灰白色を呈し、胎土はすべて精良で焼成は堅微である。48は口径7.8 ㎝、器高1.5 ㎝の瓦器。49は須恵器壷の底部でと

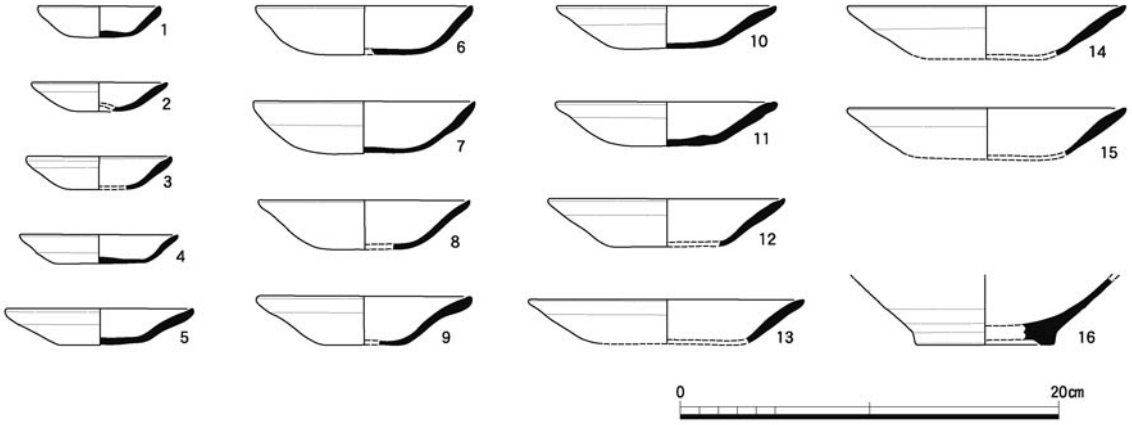


図14　池77-Ⅰ期出土土器実測図（1：4）

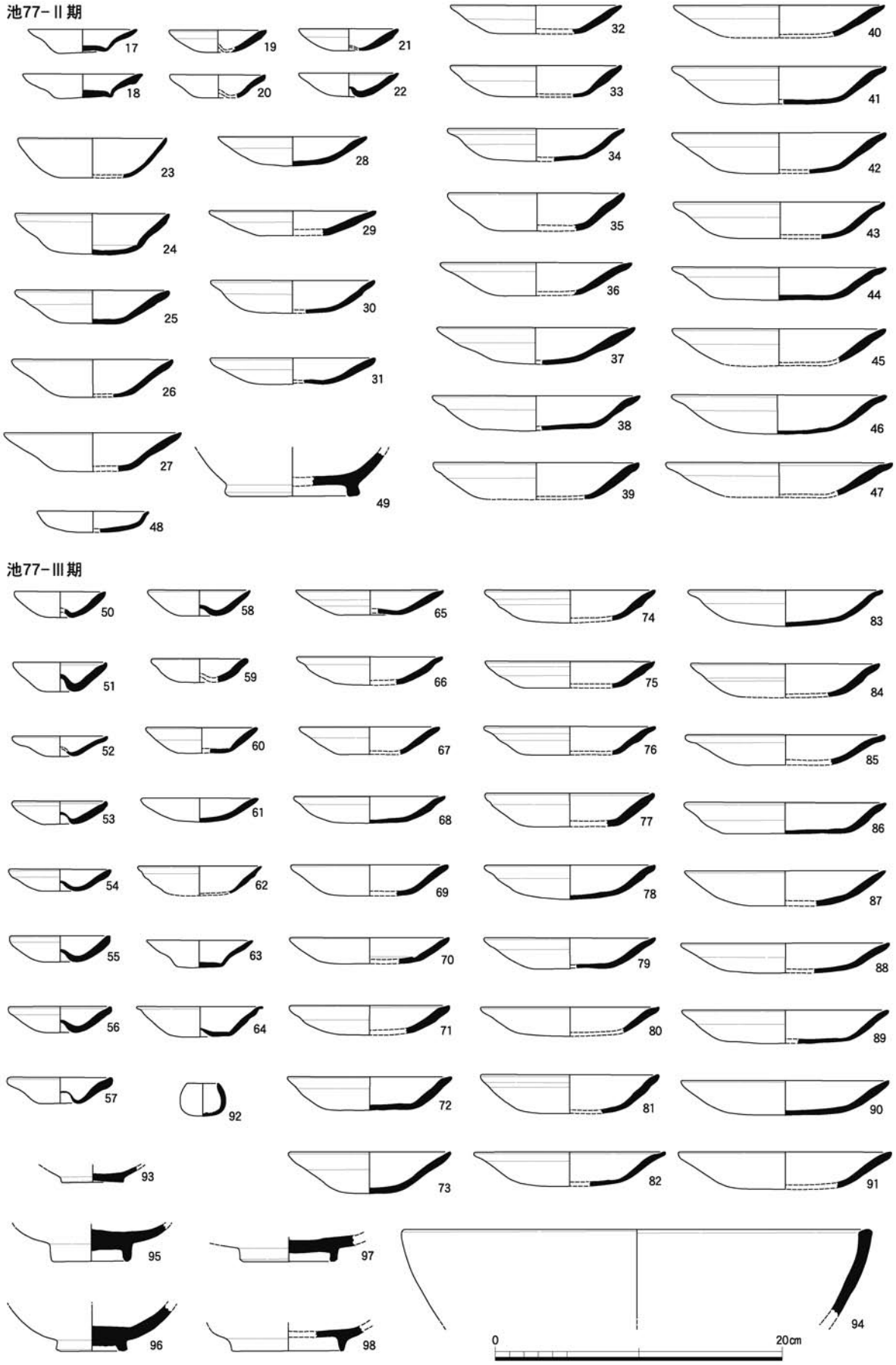


図 15　池 77-Ⅱ・Ⅲ期出土土器実測図（1：4）

もに混入品である。

池 77- Ⅲ期出土土器（50 ～ 98、図 15） 50 ～ 59 は口径 6.2 ～ 7.2 ㎝、器高 1.4 ～ 2.0 ㎝のへそ皿である。胎土はすべて精良で焼成は堅微である。色調は 50・53・54 が黄橙色、51・55 ～ 57・59 が浅黄橙色、52・58 が灰白色を呈する。60 ～ 64 は口径 7.4 ～ 8.8 ㎝、器高 1.7 ～ 2.1 ㎝の小型の土師器皿である。60・62・63 は平底の底部から外に直線的に開く体部をもち、内面の底部と体部の境が凹む。61 は丸底の底部から直線的に開く体部をもつ。胎土、焼成ともに良好である。色調は 60 が灰白色、61・62 が浅黄橙色、63・64 が黄橙色を呈す。65 ～ 81 は口径 9.6 ～ 12.5 ㎝、器高 1.9 ～ 2.5 ㎝の土師器皿。73 は器高 2.9 ㎝あり深い。小さな丸底から外に開く体部で、口縁端部は上方につまみ上げるようにナデる。底部外面は無調整で、体部上半から内面、底部内面をナデ仕上している。胎土、焼成はすべて良好である。色調は 65 が灰白色、66 ～ 76 が浅黄橙色、77 ～ 80 が橙色、81 が褐灰色を呈す。82 ～ 91 は口径 13.2 ～ 14.8 ㎝、器高 2.2 ～ 2.6 ㎝の大型の土師器皿である。胎土、焼成はすべて良好で、色調は 82・84・88・89 が橙色、83・86・87・90 が浅黄橙色、85 が黄褐色、91 が灰白色を呈す。92 は口径 2.2 ㎝、器高 2.3 ㎝の「つぼつぼ」と呼ばれる小型壷である。外面は全面に丁寧なオサエ、内面はナデ仕上を施している。胎土、焼成ともに良好で色調は灰白色を呈す。93 は緑釉陶器皿で平安時代のものである。胎土は須恵質で釉は丁寧に施釉される。94 は瓦質陶器の焙烙である。内面は丁寧なナデ、外面および口縁端部は磨きを施している。胎土はやや軟質で焼成は堅微である。95 ～ 97 は輸入青磁椀の底部である。98 は輸入青磁皿の底部である。

池 77- Ⅳ期出土土器（99 ～ 110、図 16・17）

99 ～ 101 は口径 7.8 ～ 8.2 ㎝、器高 1.6 ～ 1.9 ㎝の小型の土師器皿である。上げ底気味の平底から内湾して立ち上がる体部から口縁端部は外方につまみ出される。胎土、焼成ともに良好で、色調はすべて黄橙色を呈す。内面の体部と底部の境は凹む。102 ～ 104 は口径 6.4 ～ 6.8 ㎝、器高 1.4 ～ 1.6 ㎝のへそ皿である。胎土、焼成ともに良好で、色調は 102 が浅黄橙色、103・104 が橙色を呈す。105 ～ 107 は口径 10.8 ～ 11.5 ㎝、器高 2.0 ～ 2.2 ㎝の土師器皿である。胎土、焼成ともに良好で、色調は浅黄橙色を呈す。108・109 は口径 14.4・15.4 ㎝、器高 2.8・2.6

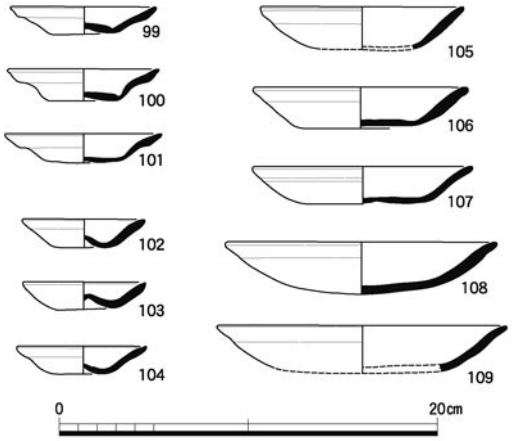


図 16　池 77- Ⅳ期出土土器実測図（1 ： 4）

図 17　池 77- Ⅳ期出土瓦質陶器風炉

図 18　池 77 出土壁土

㎝を測る土師器皿である。ともに胎土、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。110 は瓦質陶器の風炉である。

壁土（図 18）Ⅱ期の埋土から多量の瓦とともに壁土が出土している。大きさは径 10 ～ 15 ㎝のものが多い。瓦同様に火を受け焼け歪んでいるものがある。径 0.2 ～ 1.2 ㎝の石粒や小礫とスサを多く含む。上塗りのあるものは観察できなかった。

土壙 06 出土土器（111 ～ 149、図 19） 111 ～ 116 は口径 5.1 ～ 5.6 ㎝、器高 1.1 ～ 1.4 ㎝の小型の土師器皿である。内面から外面口縁部まではナデ、底部外面はオサエによる調整を施す。胎土は精良で焼成も良好である。色調はすべて橙色から赤褐色を呈す。117 ～ 119 は口径 7.2 ～ 9.4 ㎝、器高 1.8 ～ 2.0 ㎝の土師器皿である。117 は胎土に石英粒を多く含み、118・119 も長石・チャートの石粒を多く含む。色調は 117 が褐灰色、118・119 灰黄褐色を呈し、内外面に煤が付着する。120 ～ 134 は口径 9.8 ～ 11.0 ㎝、器高 1.5 ～ 2.2 ㎝の土師器皿である。丸底気味の底部から体部が外上方にのびる。内面底部と体部の境に圏線が巡る。内面から口縁部はナデ、底部外面はオサエによる調整を施す。胎土は良好で、133・134 は二次的に火を受け器面がもろくなっている。他のものは黄橙色から浅黄橙色を呈し、128 を除き口縁部の一部に煤が付着する。135 はロクロ整形による土師質の壷である。口径 5.6 ㎝、器高 2.2 ㎝を測る。底部はヘラ切りで体部から内面にかけて回転ナデを施す。胎土は灰白色で緻密であるが、内面は燻され、瓦器のような褐灰色を呈す。口縁端部に煤が付着する。136 は口径 7.0

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
古墳時代	土師器			１点	０箱
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦		須恵器１点、緑釉陶器１点、輸入陶磁器１点、軒丸瓦２点、軒平瓦１点	少量	０箱
鎌倉時代	土師器、瓦器、瓦		瓦器１点、軒丸瓦16点、軒平瓦43点、丸瓦９点、平瓦７点、鬼瓦４点、雁振瓦２点、焼瓦一括	少量	100箱
室町時代	土師器、瓦質陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、壁土		土師器100点、瓦質陶器２点、輸入陶磁器４点、壁土一括	21箱	０箱
江戸時代	土師器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、土製品、金属製品、石製品		土師器32点、土師質土器５点、土製品２点、	43箱	０箱
合　計		201箱	235点（36箱）	65箱	100箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より28箱多くなっている。

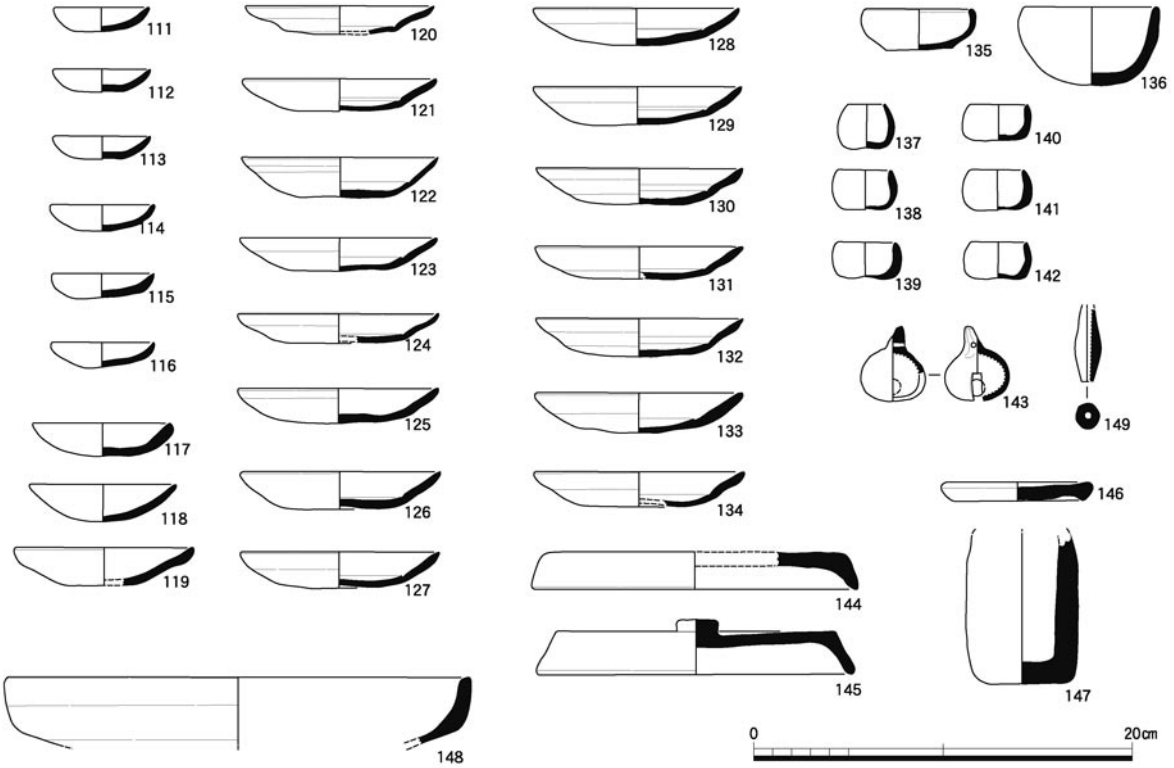


図 19　土壙 06 出土土器類実測図（1 ： 4）

㎝、器高 4.1 ㎝を測る土師器の壷である。丸底を呈し、外面はオサエ、内面はナデを施す。体部外面上半にはオサエによる指頭痕を残す。胎土、焼成は良好で、色調は橙色を呈す。137 ～ 142 は口径 2.0 ～ 3.2 ㎝、器高 1.9 ～ 2.4 ㎝の小型壷。胎土、焼成は良好で浅黄橙色から灰白色を呈す。143 は土師質の土鈴。高さ 3.9 ㎝、最大幅 3.0 ㎝、鈕の高さ 1.1 ㎝を測る。体部下半に幅 0.6 ㎝の透かしを入れ、中に直径 0.9 ㎝の土製の玉を入れる。鈕と体部の接合部に直径 0.2 ㎝の紐穴を通している。外面はオサエとナデにより成型する。胎土、焼成は良好で、浅黄橙色を呈す。144・145 は土師質の蓋である。144 は口径 17.0 ㎝、145 は口径 16.6 ㎝、器高 2.3 ㎝を測る。ロクロ成型で、回転ナデを施す。145 は中央に直径 2.2 ㎝、高さ 0.9 ㎝のつまみを付ける。146 は口径 8.0 ㎝の焼塩壷の蓋。天井部は回転ナデ後オサエ、内面には布目を残す。147 は焼塩壷。体部は直立し、口縁部はやや窄む。内面はしぼり、体部外面はヨコ方向にハケ目を残す。胎土はともに石粒を多く含むが焼成は良好。色調は黄橙色を呈す。148 は土師質の鉢。口縁から内面は回転ナデ、体部はヘラケズリを施す。149 は須恵質の土錐である。両端は欠けるが 3.8 ㎝、最大幅 1.4 ㎝ある。胎土は緻密で暗灰色を呈す。

（3）瓦類

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・棟端飾瓦・雁振瓦などがある。

軒瓦の出土総数は 278 点で、そのうち 234 点が池 77 からの出土である。池は 4 期に分けられ、Ⅰ期の池から 45 点（軒丸瓦 34 点・軒平瓦 11 点）、Ⅱ期の池からは 38 点（軒丸瓦 16 点・軒平瓦 22 点）、Ⅲ期の池からは 151 点（軒丸瓦 66 点・軒平瓦 85 点）が出土した。その他にまとまっ

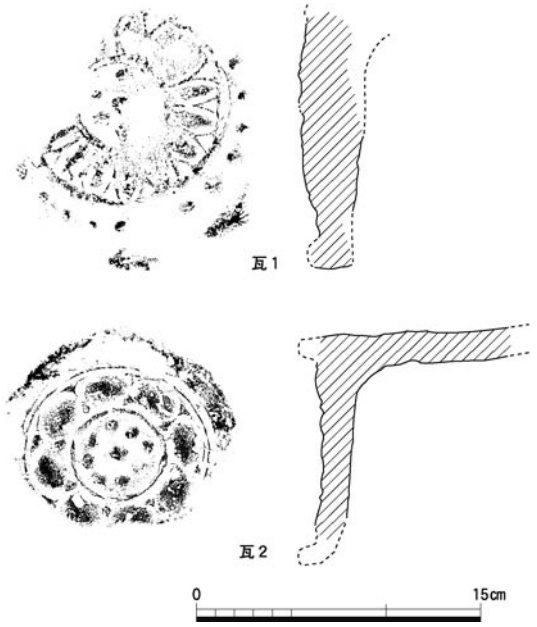


図 20　軒丸瓦拓影・実測図１（１：４）

て出土しているのは、井戸 119 から 10 点（軒丸瓦１点・軒平瓦９点）、18 層の整地層から 13 点（軒丸瓦８点・軒平瓦５点）である。その他の遺構・整地層からは 21 点（軒丸瓦 10 点・軒平瓦 11 点）出土した。

その他の瓦類は、丸瓦、平瓦、鬼瓦片・棟端飾瓦片 10 点､雁振瓦（伏間瓦）２点などである。

軒丸瓦（図 20・21、図版６） 軒丸瓦は合計 135 点出土し、そのうち巴文が 128 点と最も多い。あとは蓮華文５点・三葉葵文１点・不明１点である。

蓮華文軒丸瓦（瓦１・瓦２）は平安時代のものである。瓦１は単弁 16 葉蓮華文で、中房に１＋６の蓮子を配する。内外区を分ける界線は太く弁の先端が接する。珠文は大きめでやや密に配する。胎土は砂粒・細石を含むが密である。やや軟質で灰色を呈する。瓦２は単弁８葉蓮華文である。中房に１＋８の蓮子を配する。花弁は大きめで丸く横に広がる。間弁は三角形を呈する。胎土は砂粒を含み粗い。やや軟質で灰色を呈する。瓦３は凸形中房に「卍」を配する複弁蓮華文である。子葉は盛り上がる。外区に珠文を配する。胎土は砂粒を含むが密である。硬質で灰白色を呈する。

巴文軒丸瓦は鎌倉時代のもので、すべて三巴文である。巴文の巻込みの方向、界線･珠文の有無、頭・尾の接し方などで分類した結果、巴文軒丸瓦は８形式 44 点である。その他に小片のため形式分類できなかったものが 84 点ある。調整はナデが主体である。瓦当外周上部から丸瓦凸面にかけ

表４　巴文軒丸瓦分類表

三巴文　右巻き

- 珠文なし ― 界線なし ― 頭が接しない ― 尾が界線に接しない　（瓦18）
- 珠文あり
  - 内外界線あり
    - 頭が接する ― 尾が界線に接する　（瓦４・瓦11・瓦12）
    - 頭が接しない
      - 尾が界線に接する　（瓦５・瓦14）
      - 尾が界線に接しない　（瓦13）
  - 内界線あり ― 頭が接しない
    - 尾が界線に接する　（瓦６）
    - 尾が界線に接しない　（瓦７・瓦15～瓦17）
  - 外界線あり ― 頭が接しない ― 尾が界線に接しない　（瓦10）
  - 界線なし ― 頭が接しない ― 尾が界線に接しない　（瓦９）

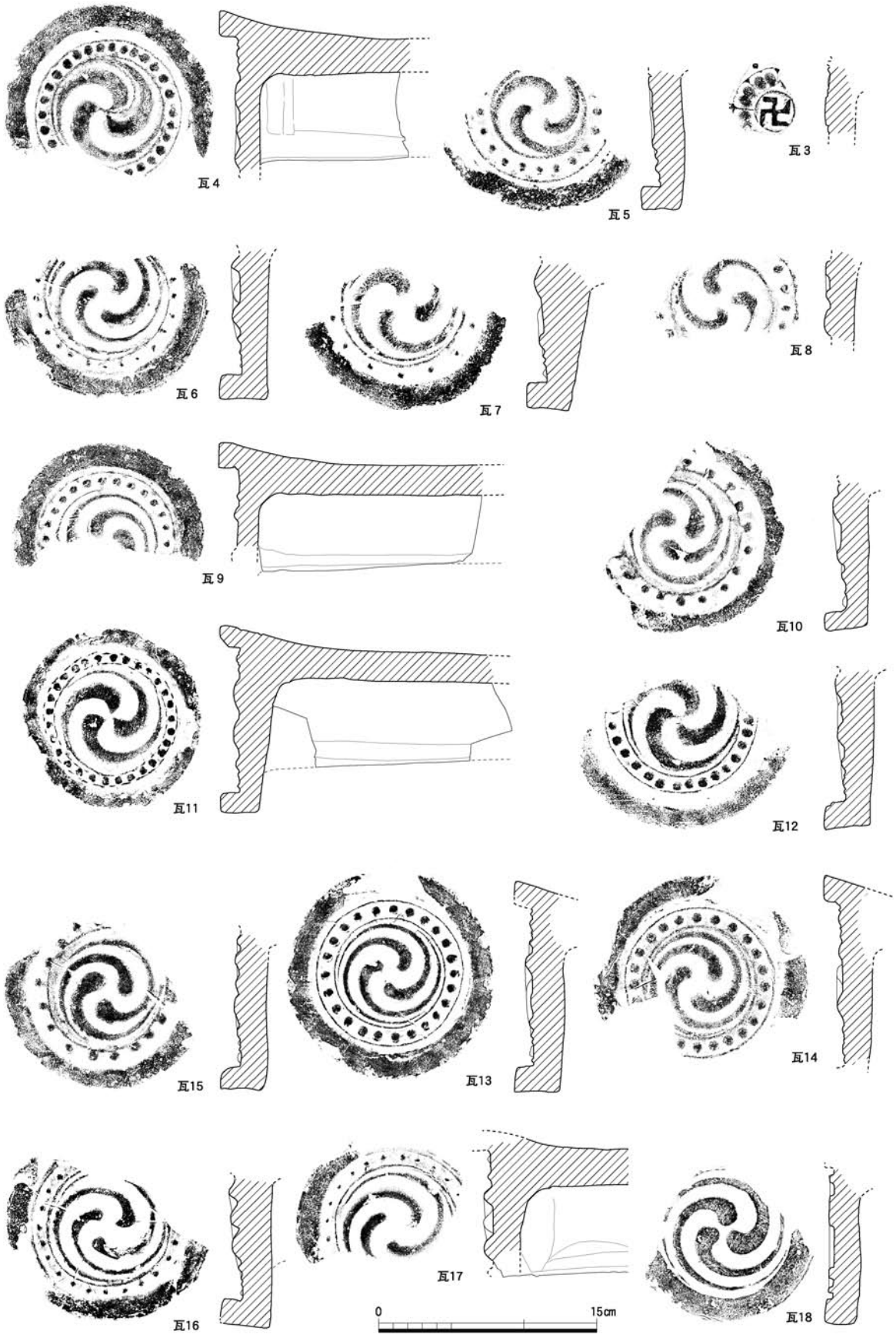


図21　軒丸瓦拓影・実測図２（１：４）

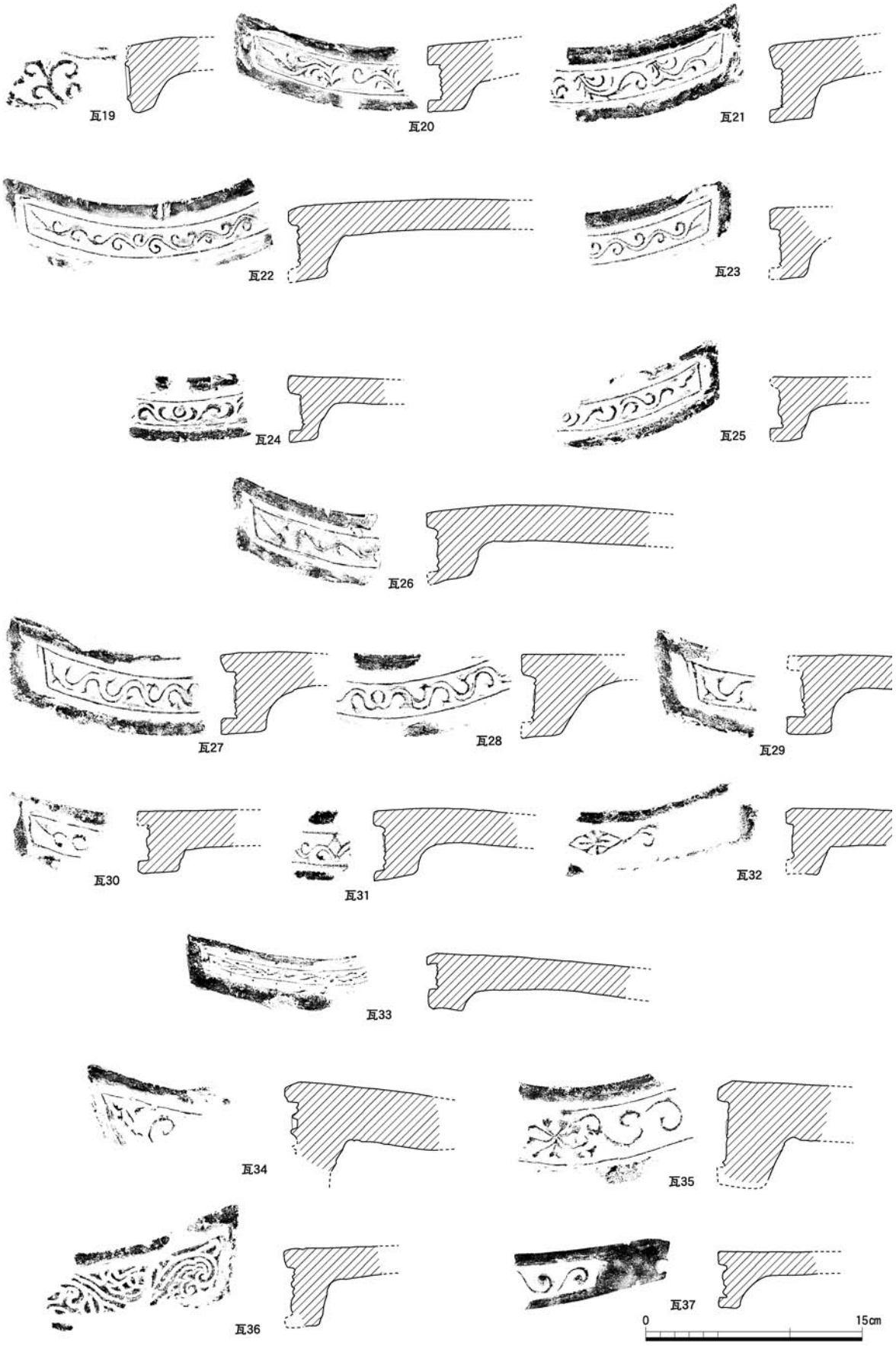


図 22　池 77 出土軒平瓦拓影・実測図 1（1：4）

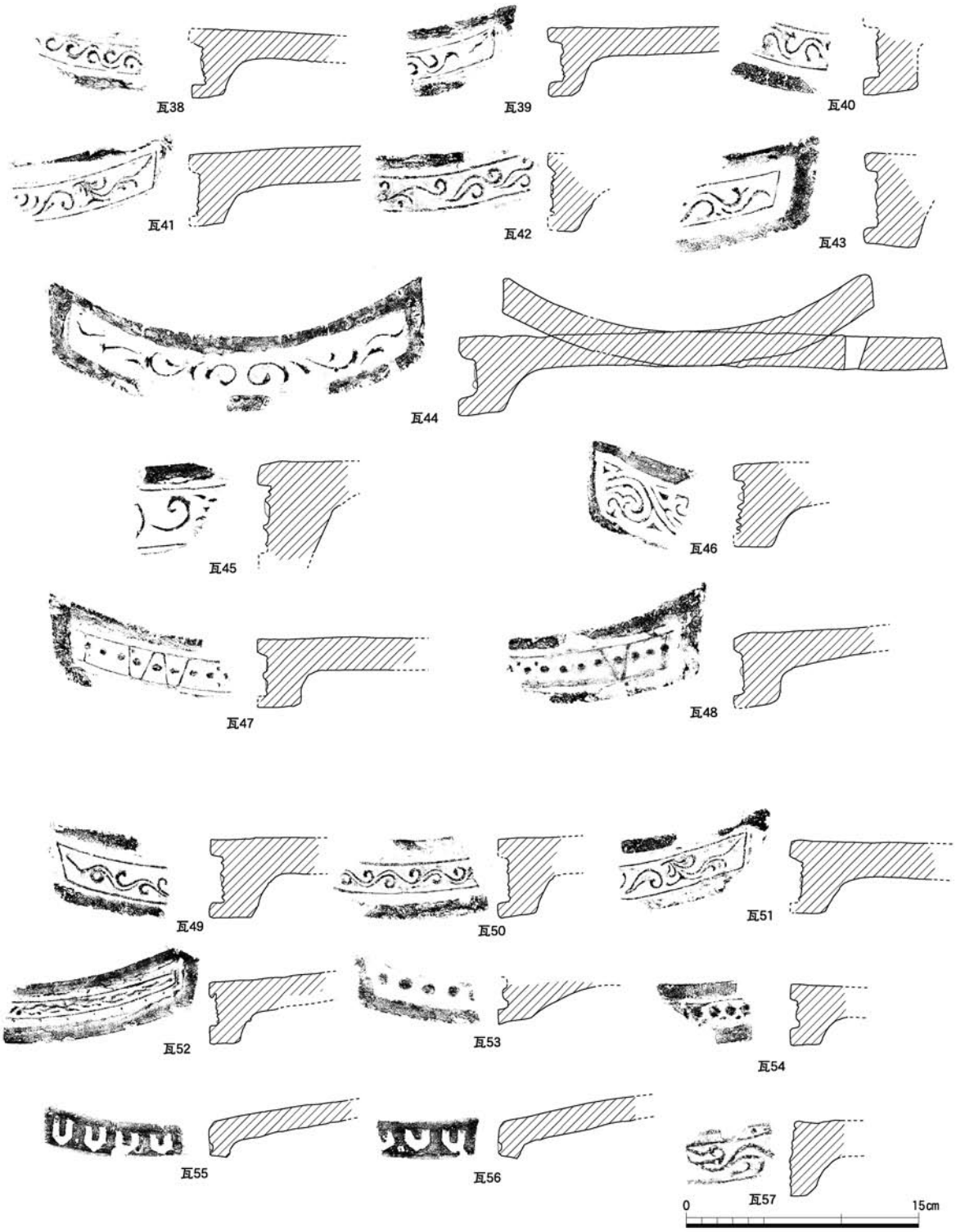


図 23　池 77 出土軒平瓦拓影・実測図２（１：４）

ては縦方向のナデ、瓦当外周下部は横方向のナデを施す。丸瓦凹面に吊紐の痕跡を認めるものがある。

三葉葵文軒丸瓦は攪乱壙より出土しており江戸時代のものと考えられる。

軒平瓦（図 22 ～ 24、図版７）軒平瓦は合計 144 点出土し、そのうち唐草文が 128 点と最も多い。唐草文は 17 形式 128 点、剣頭文は２形式４点、連珠文は２形式６点、不明６点である。

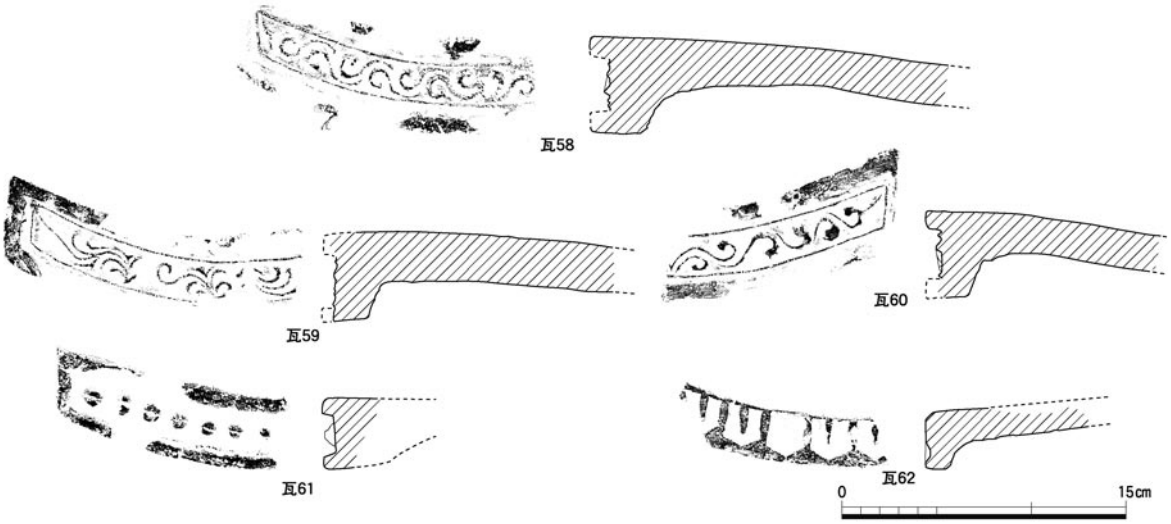


図 24　井戸 119 出土軒平瓦拓影・実測図（1 ： 4）

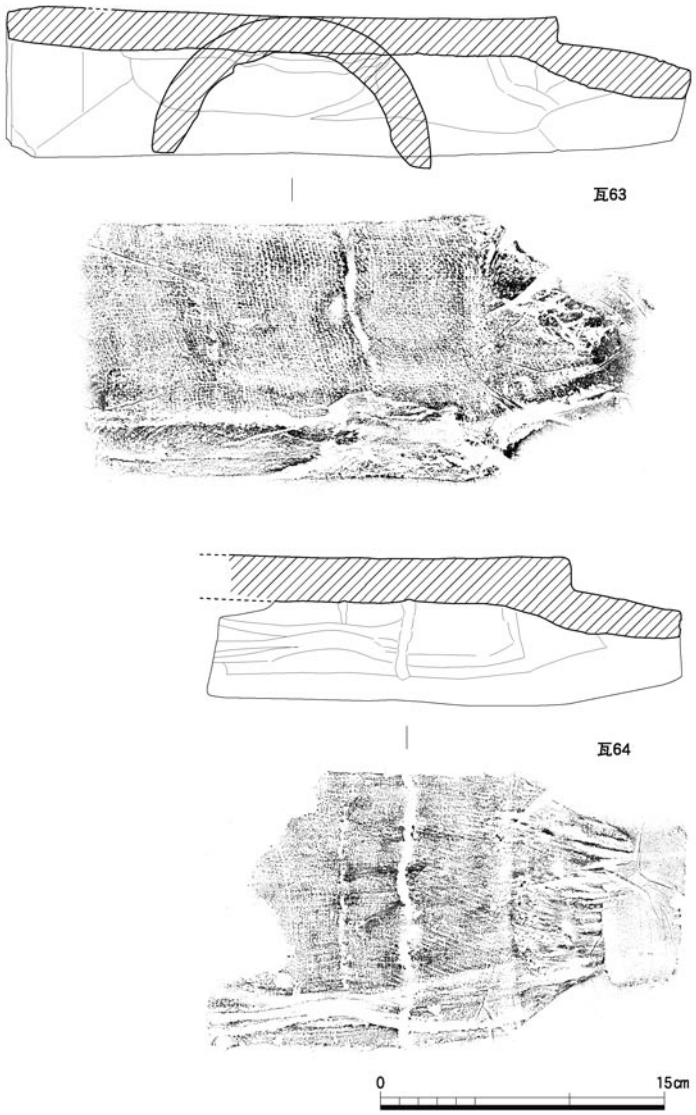


図 25　丸瓦拓影・実測図（1 ： 4）

軒平瓦も鎌倉時代のものが圧倒的に多いが、瓦 19 は平安時代のものである。半折曲げ技法で、唐草は緩く巻き込む。胎土は砂粒を含みやや粗い。やや軟質で灰白色を呈する。

唐草文軒平瓦は鎌倉時代のもので、東福寺創建期の瓦と同文のものが半分強を占める（瓦 20 ～瓦 23・瓦 27 ～瓦 31・瓦 38 ～瓦 41・瓦 49・瓦 51・瓦 59・瓦 60）。

瓦 44 は 西 大 寺（320・309A）と同文と思われる。

瓦 47・瓦 48 の連珠文は薬師寺（310）に類似する。

平瓦部凸面に、凹型台の圧痕を残すもの（瓦 44）がある。また、顎部から平瓦凸面の境に粘土が帯状に残ったり、段差がついたりするものが多く認められた。これは顎貼り付け・瓦当貼り付けに伴う接合時の調整痕と考えられる。

丸瓦（図 25） 玉縁丸瓦で、ほと

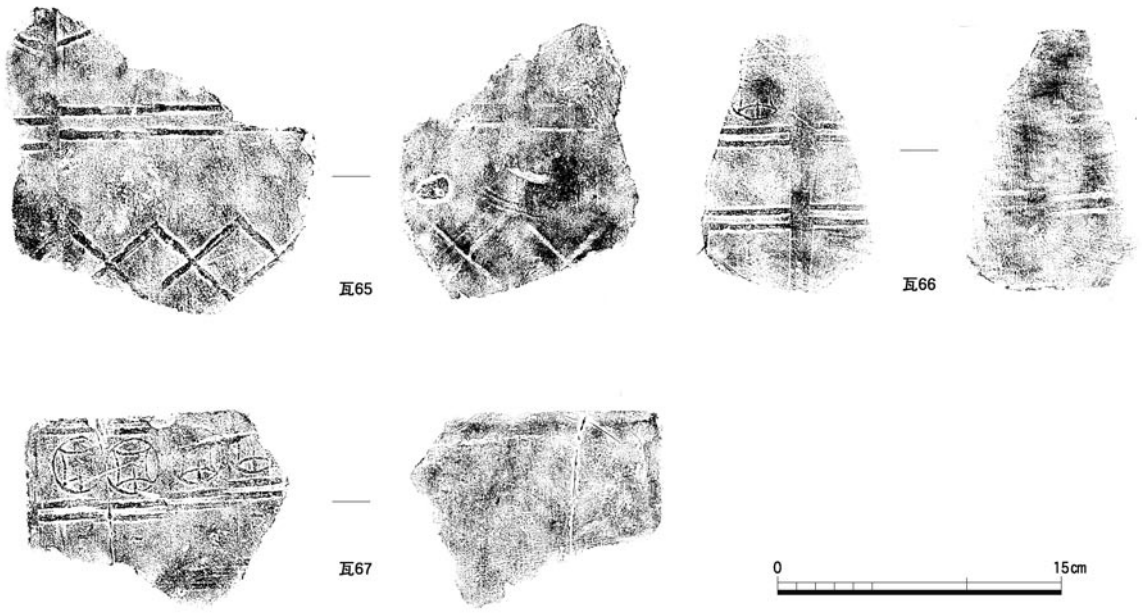


図 26　平瓦拓影（1 ： 4）

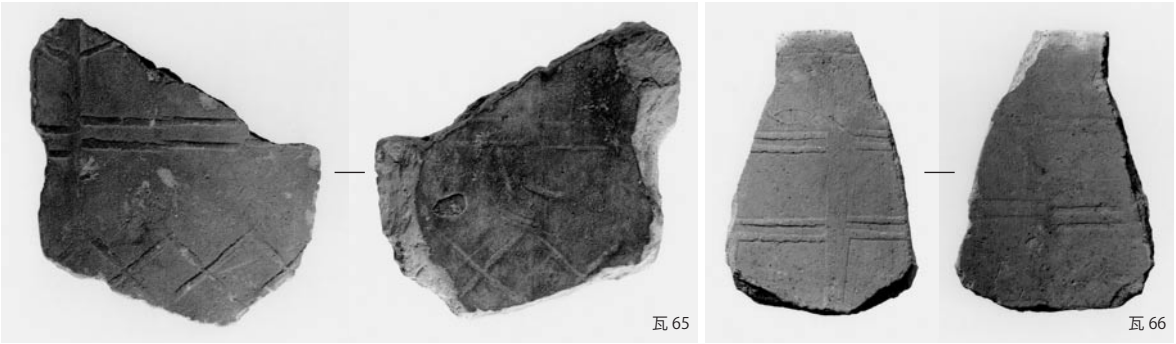


図 27　積み重ねによる転写が認められる平瓦

図 28　平瓦凸面のタタキ目

んどが小片であるが丸瓦凹面に吊紐の痕跡を残すもの（瓦 63・瓦 64）がある。ともに横方向に紐を通すものである。このほかにも小片であるが、ループ状の痕跡を残すものがある。

瓦 63 は丸瓦凸面にタタキ目がわずかに残り縦方向にナデる。玉縁部分は横方向にナデる。丸瓦凹面広端部は横方向に削り面取りする。胎土は砂粒を含みやや粗い。硬質で灰色を呈する。

瓦 64 は丸瓦凸面玉縁部より横方向にナデる。広端面側は縦方向にナデる。玉縁部分は横方向にナデる。玉縁後端面中央に三角形の刻印が押されている。

平瓦（図 26 ～ 28）平瓦凸面にタタキ目が残るもの（瓦 68）が多く出土している。タタキ目をもつ平瓦は凹面に積重ねによるタタキ目の転写が認められるもの（瓦 65 ～瓦 67）・離砂の痕跡が

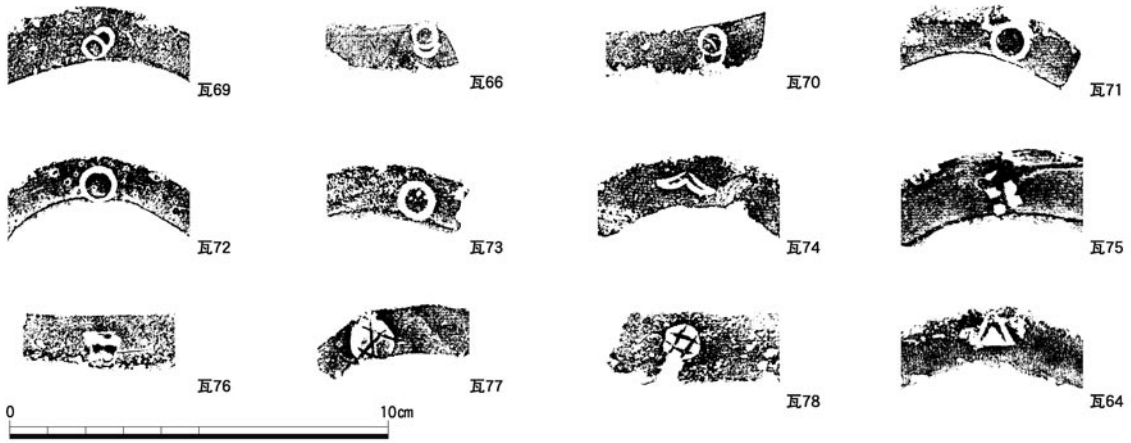


図 29　刻印瓦拓影（1：2）

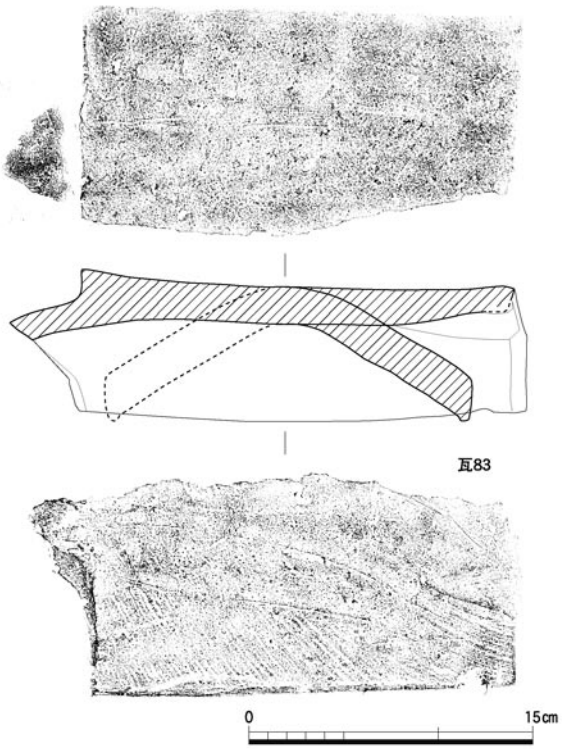


図 30　雁振瓦拓影・実測図（1：4）

図 31　雁振瓦

顕著なもの・布目痕が残るものがある。平瓦凹面に布目痕が残るものは少数で、離砂の痕跡が顕著なものが多い。

刻印瓦（図 29）　刻印は丸瓦の後端面（瓦 75）や玉縁部後端面（瓦 64・瓦 69・瓦 71 ～瓦 74・瓦 77）、平瓦の端面（瓦 66・瓦 70・瓦 76・瓦 78）などに押印されたものである。模様は丸が重なっているもの・双葉・四角形・井桁・三角などがある。

鬼瓦・棟端飾瓦（図版 8）　鬼瓦（瓦 79 ～瓦 82）はほとんど小片である。下棟や隅棟などに使われたと思われる小さめのものが数点出土している。瓦 80・瓦 81 は珠文帯を線刻で表現し、珠文も押印（竹管文風）で表現している。

その他に、鬼面以外の模様を配したと考えられる棟端飾瓦の小片も数点出土した。

雁振瓦（伏間瓦）（図 30・31）　大棟に葺いたと思われる大きめのもの（瓦 84）と、下り棟などに使用されたと考えられる少々小振りのもの（瓦 83）がある。瓦 84 は、凸面は縦方向のナデ。凹面は中央部には布目痕が残る。凹面端部分は縦方向にナデる。玉縁部凹面端部は横方向にケズる。玉縁部側面から面取りを施す。瓦 83 は、凸面は縦方向のナデ。

表５　軒瓦一覧表

番号	種類	文様	瓦当文様の特徴	成形手法	遺構名	同笵・同文
瓦１	軒丸瓦	蓮華文	中房に１＋５の蓮子を配する。内外区を分ける界線は太く、単弁の弁端が接する。珠文はやや大粒でやや密に配する。	残存部分に布目痕が残る。粗いナデ。	池77-Ⅲ期	平古55と類似、中房が違う
瓦２	軒丸瓦	蓮華文	単弁８葉蓮華文。中房に１＋８の蓮子。花弁は大きめで丸く横に広がる。	瓦当外周上部に指圧痕。丸瓦凸面は縦方向のナデ。一部斜め方向のヘラナデ。瓦当裏面は縦方向のナデ。瓦当から丸瓦凹面にかけて横方向のナデ。一部に布目痕が残る。	攪乱	
瓦３	軒丸瓦	卍蓮華文	凸型の中房に卍を配する。複弁で蓮弁は互いに接し子葉は盛り上がる。外区には珠文が巡る。	小片のため詳細不明。	池77-Ⅲ期	木村766と同文
瓦４	軒丸瓦	巴文	巴の頭は三角形状を呈し先端部が互いに接する。尾は界線に接する。珠文はやや大粒で密に配する。	瓦当裏面はナデ。瓦当裏面下半分は横方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦５	軒丸瓦	巴文	巴の頭は互いに接しない。尾は内側界線に接する。外側界線もある。珠文はやや密に配する。	瓦当裏面はナデ調整。瓦当裏面下端は外周に沿ってナデ。（横方向のナデ）	池77-Ⅲ期	
瓦６	軒丸瓦	巴文	巴の頭は互いに接しない。尾は界線に接する。外周の珠文帯は小粒。直立縁。	瓦当外周下部は横方向のナデ。瓦当裏面は横方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦７	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。珠文は小さめで粗めに配する。	瓦当裏面ナデ調整。下端は外周に沿ってナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦８	軒丸瓦	巴文	巴の頭は互いに接しない。	瓦当裏面は横方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦９	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。界線はない。珠文は小粒で密に配する。周縁は直立縁。	瓦当外周上部は横方向のナデ。丸瓦凸面は縦方向のナデ。瓦当裏面中央は横方向のナデ。瓦当と丸瓦凹面の接合部分は横方向のナデ。丸瓦凹面の布目痕は斜め方向にナデ消す。	池77-Ⅱ期	
瓦10	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。内外区を分ける界線に接して珠文が巡る。珠文はやや密に配する。周縁は直立縁。	瓦当外周下部は横方向のナデ。側面は縦方向のナデ。瓦当裏面中央は横方向のナデ。下部は外周に沿ってナデ。	池77-Ⅱ期	
瓦11	軒丸瓦	巴文	巴の頭は三角形状を呈し先端部が互いに接する。尾は互いに接し界線に接する。外側界線もある。珠文は小さめで密に配する。	瓦当外周上部から丸瓦凸面にかけて縦方向のナデ。外周下部は横方向のナデ。瓦当裏面下部は外周に沿ってナデ。瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて横方向のナデ。丸瓦凹面の布目痕は斜め方向のナデ。吊紐の痕跡は縦方向に残る。	池77-Ⅰ期	
瓦12	軒丸瓦	巴文	巴の頭は三角形状を呈し先端部が互いに接する。尾は互いに接し内側界線と接する。外側界線もある。珠文は密に配する。	瓦当外周下部は横方向のナデ。瓦当裏面下部分は横方向のナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦13	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。外区は界線で区切られる。珠文は密に配する。	瓦当外周上部は横方向のナデ。側面は縦方向のナデ。外周下部は横方向のナデ。瓦当裏面下部は外周に沿ってナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦14	軒丸瓦	巴文	巴の頭は互いに接しない。尾は互いに接し内側界線に接する。外側界線もある。珠文は密に配する。	瓦当外周上部は縦方向のナデ。外周下部は横方向のナデ。瓦当裏面は横方向のナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦15	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。内側界線に接して珠文を配する。外側界線はない。	瓦当外周下部は横方向のナデ。瓦当裏面は横方向のナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦16	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。内外区をわける界線あり。珠文は小さめで密に配する。	瓦当外周下部は横方向のナデ。丸瓦凸面は縦方向のナデ。瓦当裏面のナデは斜め方向で交差する。	池77-Ⅰ期	

番号	種類	文様	瓦当文様の特徴	成形手法	遺構名	同笵・同文
瓦17	軒丸瓦	巴文	巴の頭・尾は互いに接しない。小粒の珠文をやや密に配する。内側界線あり。	丸瓦凸面は縦方向のナデ。瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて横方向のナデ。丸瓦凹面は布目痕が残る。丸瓦凹面に縦方向に２条のヘラナデの痕跡。	SE119	
瓦18	軒丸瓦	巴文	珠文・界線はない。巴の頭・尾はともに界線に接しない。尾が外縁に接する。	瓦当裏面に指圧痕が残る。瓦当外周下部は縦方向のナデ。	包含層	
瓦19	軒平瓦	唐草文	唐草は右から左へ展開する。子葉の巻きはやや緩やかである。	半折曲げ。瓦当外周上端にわずかに布目痕が残る。その上を横方向のナデ。平瓦凸面から顎部にかけて指圧痕が明瞭に残る。	池77-Ⅲ期	
瓦20	軒平瓦	唐草文	中心から左側の２単位で下から左上方に向かって展開する。	平瓦凹面には布目痕が残る。瓦当外周上端は横方向のナデ。瓦当外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。平瓦凸面と顎部との境に凹型台の圧痕が残る。瓦当外周下端に離砂が付着する。	池77-Ⅲ期	瓦21・41・51・59と同文。東福寺66と同文。
瓦21	軒平瓦	唐草文	中心から右側の２単位で、唐草は上から右下に向かって展開する。瓦当面に離砂の付着が見られる。	平瓦凹面の一部に布目痕が残るが、縦方向にナデ消す。瓦当外周上端は横方向のナデ。瓦当外周下端から顎部にかけては横方向のナデ。平瓦凸面と顎部との境に凹型台の圧痕が残る。平瓦凸面は縦方向のケズリ。	池77-Ⅲ期	瓦20・41・51・59と同文。東福寺66と同文。
瓦22	軒平瓦	唐草文	中心飾りに上向きＣ字をおき左右に６反転する。唐草から脇区上方に向かって子葉が伸びる。	瓦当外周上部は横方向に軽いケズリ。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。顎部と平瓦凸面の境に凹型台の圧痕が残る。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦23と同文。東福寺56と同文。
瓦23	軒平瓦	唐草文	唐草の巻きはやや強めである。最端より１つ手前の唐草から子葉が伸びる。	瓦当外周上部は横方向に軽くケズる。外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。瓦当面に離砂が付着する。	池77-Ⅲ期	瓦22と同文。東福寺56と同文。
瓦24	軒平瓦	唐草文	上向きＣ字を中心飾りに配す。唐草の巻きは緩やかに巻き込む。	瓦当外周上部から平瓦凹面にかけて一部布目痕が残る。平瓦凹面は横方向のナデ。瓦当外周下部は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては縦方向のナデ。顎部下端は横方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦25	軒平瓦	蓮華文	唐草の巻きが緩い。	瓦当外周上部から平瓦凹面にかけて布目痕が残る。瓦当外周下部は横方向のナデ。顎部は横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦26	軒平瓦	蓮華文	唐草の巻きが緩い。	瓦当外周上部は横方向のケズリ。外周上部に布目痕が残る。平瓦凹面は縦方向のナデで布目痕を消す。瓦当外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけて横方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦27	軒平瓦	唐草文	唐草は３反転する。唐草の先端は三股に分かれる。脇区に笵傷がある。	瓦当外周上端は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は横方向にナデ消す。外周下端から顎部にかけて横方向のナデ。顎部と平瓦凸面の境に凹型台の圧痕が残る。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦29と同笵、瓦28・40と同文。東福寺64・91～93、木村900と同文。
瓦28	軒平瓦	唐草文	中心飾りに逆Ｕ字形をおき左右に唐草が３反転する。唐草の先端は三股に分かれる。	瓦当外周上端から平瓦凹面にかけて縦方向に布目痕をナデ消す。外周下端から顎部にかけては横方向のナデ。顎部と平瓦凸面の境に凹型台の圧痕。	池77-Ⅲ期	瓦27・29・40と同文。東福寺64・91～93、木村900と同文。

番号	種類	文様	瓦当文様の特徴	成形手法	遺構名	同笵・同文
瓦29	軒平瓦	唐草文	唐草の先端は三股に分かれるが不鮮明である。脇区に笵傷がある。	瓦当外周上部から平瓦凹面の布目痕を縦方向にナデ消す。外周下部に離砂が認められる。外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。顎部と平瓦凸面の境に凹型台の圧痕が残る。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦27と同笵、瓦28・40と同文。東福寺64・91～93、木村900と同文。
瓦30	軒平瓦	蓮華文	唐草の先端が丸くなる。端の唐草から脇区上方に向かって子葉が伸びる。	瓦当外周上部から平瓦凹面にかけて丁寧なナデ。外周下部から顎部にかけて縦方向のナデ。（板状工具でナデる）	攪乱	瓦31・60と同文。東福寺62と同文。
瓦31	軒平瓦	唐草文	中心飾りは逆Ｖ字をおく。唐草先端はやや厚めになる。	瓦当外周上端から平瓦凹面にかけて縦方向のナデで布目痕をナデ消す。外周下端から顎部にかけて横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のケズリ。顎部から平瓦凸面の境は横方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦30・60と同文。東福寺62と同文。
瓦32	軒平瓦	唐草文	中心飾りは菱形の中に米印を入れる。唐草は緩く巻き込む。	瓦当外周上部は横方向のナデ。平瓦凹面は縦方向に布目痕をナデ消す。外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。側面は縦方向のケズリ。顎部と平瓦凸面の境は横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦33	軒平瓦	蓮華文	唐草は緩やかに連続して展開する。外区に小粒の珠文を粗く配する。	瓦当外周上部は軽くケズる。平瓦凹面は縦方向にやや丁寧にナデるが部分的に布目痕が残る。外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦52と同文。木村634・635と同文。
瓦34	軒平瓦	唐草文	唐草の巻込みは強い。唐草の外側に幾何学文を配する。	瓦当外周上部は軽く横方向のケズリ。平瓦凹面の布目痕は丁寧に縦方向にナデ消す。顎部下端は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦45と同文。
瓦35	軒平瓦	唐草文	中心飾り花文（放射状に子葉を９個配する）中心飾りに取りつく唐草は小さめである。２単位めからは内区いっぱいに唐草を展開する。	瓦当外周上部は軽く横方向のケズリ。平瓦凹面の布目痕は丁寧に縦方向にナデ消す。	池77-Ⅲ期	
瓦36	軒平瓦	唐草文	太めの唐草が反転する。主葉は緩やかに連続する。	瓦当外周上部は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は横方向にナデ消す。外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。顎部と平瓦凸面の境に凹型台の圧痕が残る。顎部と平瓦凸面の境は横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	瓦46と同文。木村727～729に類似 。
瓦37	軒平瓦	蓮華文	唐草の先端は大きく丸くなる。脇の周縁の幅が広い。	瓦当面・平瓦凹面は丁寧なミガキ。瓦当外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。平瓦凸面中央は横方向、端部分は縦方向のナデ。	池77-Ⅲ期	
瓦38	軒平瓦	唐草文	唐草は小さく巻き込む。	平瓦凹面の布目痕は縦方向のナデ。瓦当外周下部は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては縦方向のナデ。	池77-Ⅱ期	東福寺60と同文。
瓦39	軒平瓦	唐草文	唐草の巻き込みは緩やかである。最端の唐草から脇区上方に向かって子葉が伸びる。	平瓦凹面の布目痕は瓦当部先端まで残る。瓦当外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅱ期	瓦49と同文。東福寺61と同文。
瓦40	軒平瓦	唐草文	唐草の先端が三股に分かれる。	瓦当外周下部は横方向のナデ。	池77-Ⅱ期	瓦27～29と同文。東福寺64・91～93、木村900と同文。
瓦41	軒平瓦	唐草文	中心から右側の２単位は上から右下に向かって展開する。瓦当面に離砂の付着が見られる。	瓦当外周上端は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては縦方向のナデ。	池77-Ⅱ期	瓦20・21・51・59と同文。東福寺66と同文。

番号	種類	文様	瓦当文様の特徴	成形手法	遺構名	同笵・同文
瓦42	軒平瓦	蓮華文	唐草はやや強めに巻き込む。	瓦当外周下部から顎部は横方向のナデ。	池77-Ⅱ期	
瓦43	軒平瓦	唐草文	唐草先端が二股に分かれる。	瓦当外周上部は横方向のナデ。上端部は軽く面取り。外周下部は横方向のナデ。顎部は横方向のナデ。	池77-Ⅱ期	
瓦44	軒平瓦	唐草文	巻き込みの強い唐草を向かい合わせに配する中心飾り。右側の唐草は左寄り巻き込みが強く横に広がる。右側の文様の方が全体的に緩やかに展開する。そのため右端の子葉と唐草が１つになっている。	瓦当外周上部は横方向に緩いケズリ。平瓦凹面の布目痕は横方向にナデ消す。凹面に叩き目が転写する。凹面狭端部分には離砂の付着が目立つ。瓦当外周下部中央は横方向のナデ。両端は縦方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては縦方向のナデ。境に凹型台の圧痕が残る。	池77-Ⅱ期	西大寺309Aと同文。
瓦45	軒平瓦	蓮華文	唐草の巻き込みは強い。唐草の外側に幾何学文をおく。	瓦当外周上部は横方向にナデる。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。顎部は横方向のナデ。	池77-Ⅱ期	瓦34と同文。
瓦46	軒平瓦	唐草文	唐草は緩やかに流れ、子葉の先端は二股に分かれる。	平瓦凹面は布目痕が残るが瓦当外周上端は軽く横方向のナデ。外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。	池77-Ⅱ期	瓦36と同文。木村727～729に類似 。
瓦47	軒平瓦	連珠文	珠文を横に連ね珠文と珠文の間に斜線を入れる。最端の珠文の上下に縦方向の線が入る。中心飾りは残存部分では珠文の間に小さめの珠文を１個おく。	瓦当外周上端は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕はナデ消す。外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。顎部から平瓦凸面の境は横方向のナデ。凸面は縦方向のナデ。平瓦凸面にヘラによる細い筋が斜めに数本入る。	池77-Ⅱ期	瓦48と同文。薬師寺310と同文。
瓦48	軒平瓦	連珠文	珠文を横に連ね珠文と珠文の間に斜線を入れる。最端の珠文の上下に縦に線が入る。中心飾りは残存部分では珠文と珠文の間に小さい珠文を２個上下に配する。	瓦当外周上端は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。顎部に指圧痕が残る。顎部から平瓦凸面の境は横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅱ期	瓦47と同文。薬師寺310と同文。
瓦49	軒平瓦	唐草文	唐草の巻き込みは緩やか。最端の唐草から脇区上方に向かって子葉が伸びる。	瓦当部先端まで布目痕が残る。縦方向にナデ消す。瓦当外周下部から顎部下端にかけて横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけて縦方向のナデ。	池77-Ⅰ期	瓦39と同文。東福寺61と同文。
瓦50	軒平瓦	唐草文	唐草は緩く巻込み、６反転半する。	瓦当外周上部は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は縦方向に丁寧にナデ消す。外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦51	軒平瓦	唐草文	唐草は上から右下へ展開する。	瓦当外周上部は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。外周下部は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては縦方向のナデ。凹型台の圧痕が残る。	池77-Ⅰ期	瓦20・21・41・59と同文。東福寺66と同文。
瓦52	軒平瓦	唐草文	唐草は緩やかに連続して展開する。外区に小粒の珠文を粗く配する。	瓦当外周上部は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は横方向にナデ消す。外周下部から顎部下端は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面側は横方向のナデ。	池77-Ⅰ期	瓦33と同文。木村634・635と同文。
瓦53	軒平瓦	唐草文	珠文を横にやや密に連ねる。	瓦当外周下部は横方向のナデ。顎部は横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦54	軒平瓦	連珠文	珠文を横に密に連ねる。内区いっぱいに珠文が入る。	瓦当外周上部から平瓦凹面にかけて縦方向のナデ。外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。	池77-Ⅰ期	

番号	種類	文様	瓦当文様の特徴	成形手法	遺構名	同笵・同文
瓦55	軒平瓦	剣頭文	軸が文様の中心を通るように配する。aタイプ。	瓦当面にわずかに布目痕が残る。平瓦凹面の布目痕は横方向にナデ消す。外周下部は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては横方向のナデ。平瓦凸面には指圧痕が残る。横方向のナデ。	池77-Ⅰ期	
瓦56	軒平瓦	剣頭文	中軸が垂直方向に向く。bタイプ。	瓦当面にわずかに布目痕が残る。平瓦凹面は横方向にナデ消す。外周下部から顎部、平瓦凸面にかけて横方向のナデ。平瓦凸面は指圧痕が残る。ナデは縦・横ある。	池77-Ⅰ期	
瓦57	軒平瓦	唐草文	唐草は複線となり展開する。瓦当面に小石が入る。	平瓦凹面は布目痕が残る。外周下部は横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけて縦方向のナデ。	池77-Ⅰ期	薬師寺324と同文。
瓦58	軒平瓦	唐草文	唐草は中心から6反転する。	瓦当部先端まで布目痕が残る。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。瓦当外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のケズリ。	井戸119	
瓦59	軒平瓦	唐草文	唐草は中心から左側は下から右上方に展開する。左側は上から左下に向かって展開する。	瓦当外周上部は横方向のナデ。平瓦凹面の布目痕は縦方向にナデ消す。瓦当外周下部から顎部にかけて横方向のナデ。顎部から平瓦凸面にかけては横方向のナデ。平瓦凸面は縦方向のナデ。瓦当面に離砂の付着が目立つ。	井戸119	瓦20・21・41・51と同文。東福寺66と同文。
瓦60	軒平瓦	唐草文	唐草は6反転し最後の唐草から子葉は脇区上方に向かって伸びる。唐草先端は丸く膨らむ。	瓦当部先端まで布目痕が残る。平瓦凹面の布目痕は縦方向のナデ。瓦当外周下部から顎部にかけては横方向のナデ。顎部から平瓦部にかけては縦方向に強めのナデ。平瓦凸面は縦方向のケズリ。	井戸119	瓦30・31と同文。東福寺62と同文。
瓦61	軒平瓦	連珠文	やや大きめの連珠を瓦当中央に配する。	瓦当外周上端は面取り。平瓦凹面は布目痕をナデ消す。瓦当外周下部は横方向のナデ。顎部は縦方向のナデ。	井戸119	
瓦62	軒平瓦	剣頭文	中軸が文様の中心に向く配置をとる。	平瓦凹面の布目痕は横方向のナデ。瓦当外周上端は面取り。瓦当外周下部は横方向のナデ。顎部は横方向のナデ。平瓦凸面には指圧痕が残り、横方向のナデ。	井戸119	

同文・同笵の文献は、以下のように略した。

東福寺：『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』 大本山 東福寺　1990年

西大寺：『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』 西大寺　1990年

薬師寺：『薬師寺発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所　1987年

木村　：『木村捷三郎収集瓦図録』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

平古　：『平安京古瓦図録』 雄山閣　1977年

凹面には布目痕が残る。凹面端部分は斜め方向に工具でナデる。凹面中央部分は玉縁から指ナデを施した痕跡がある。

5．まとめ

今回の調査ではⅣ期にわたり変遷したとみられる万寿禅寺内にあった池を検出した。しかし、出土遺物から室町時代の中頃に収まるものである。Ⅰ・Ⅱ期の池からの出土遺物は平安京編年の京都Ⅸ期の新しい段階（15 世紀後半）、Ⅲ・Ⅳ期の池からの出土遺物は京都Ⅹ期の古い段階（16 世紀前半）に位置づけられる[1)]。またⅡ期の池は火災処理土により埋められており、出土した瓦の大半が火を受け焼け歪んでいる。文献によれば永享六年（1434）二月「市中大火に万寿寺類焼」（「満済准后日記」）とあり、その３年後の永享九年、大殿、山門、方丈が新成する。また、宝徳三年（1451）「寺十境を選定」（「京城山万寿禅寺記」東福寺誌）とある。万寿禅寺の伽藍については全く不明であり、今回検出した池 77 が寺域の中でどのような位置を占めるか不明であるが、Ⅲ期の池は、宝徳三年の十境を選定するにあたり再整備されたものであろう。

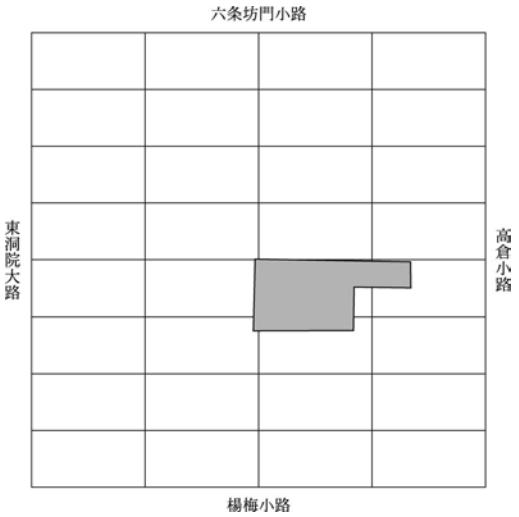


図 32　左京六条四坊三町四行八門と調査位置

今回の調査では、白河天皇造営の「六条院」に係わる遺構の検出はできなかった。しかし、鎌倉時代とみられる地業状遺構を検出しており、また少量ではあるが平安時代からの遺物も出土している。今後、近隣の調査を進めることにより、白河天皇造営の「六条院」から、皇女郁芳門院追善のための「六条御堂」、そして「万寿禅寺」と変遷した当地の様相を明らかにすることができるであろう。

註

1）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1996 年

図　　版

報　告　書　抄　録

ふりがな	へいあんきょうさきょうろくじょうしぼうさんちょうあと
書名	平安京左京六条四坊三町跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２００６－２９
編著者名	菅田　薫
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2007年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京六条四坊三町跡（へいあんきょうさきょうろくじょうしぼうさんちょうあと）	京都市下京区間ノ町通五条下る大津町２他（きょうとししもぎょうく あいのまちどおりごじょうさがるおおつちょうほか）	26100		34度59分45秒	135度45分43秒	2006年11月28日～2007年３月12日	600㎡	消防署新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京六条四坊三町跡	都城跡	古墳時代		土師器	
		平安時代		土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦	
		鎌倉時代	地業状遺構	土師器、瓦器、瓦	
		室町時代	池	土師器、瓦質陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、壁土	
		江戸時代	土壙、井戸、整地層、耕作土層	土師器、土師質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、土製品、金属製品、石製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-29

平安京左京六条四坊三町跡

発行日　2007 年 3 月 31 日

編　集
発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093　℡ 075-256-0961